だいきのうた

R18G

だいきのうた

※ＰＣゲーム「沙耶の唄」、「sweetpool」のパロディ要素を過分に含んでおります
※一部にカニバリズムを含むグロテスクな描写、犯罪描写、性描写を含みますので18才以下の方の閲覧はご遠慮ください

せかいでただひとりおまえがいればいい

だいき。

どうなってもいっしょにいたいっておもう。これが、こいなの？

たいが。

二人の愛が、世界を壊す

第一章　前兆	3
第二章　邂逅	１０
第三章　萌芽	１９
第四章　転機	２７
第五章　真実	３６
第六章　融合	４５
最終章　開花	５１
番外編『幸福な箱庭』（書き下ろし）	５５

第一章　前兆

その目に映る世界は、酷くいびつで、醜くて、全部が壊れてしまえば良いと心の底から願っている。
たった一人の存在を除いて。
火神大我にとっての世界とは、酷く偏っていた。

ごく普通の日常を送っていた火神大我の世界が変質したのは、ある事件がきっかけだった。
それまでの彼はごく普通の学生に過ぎなかった。さして得意でも無い勉学を学び、得意としているバスケに精を出す。そうして友人と馬鹿なことをやって過ごす。そんなありふれた日々を過ごしていた。
父親の運転する車に乗っていた際に大事故に巻き込まれ、意識不明の重体となるまでは。
その交通事故に遭った結果、脳の認識部位に重大な損傷を負った火神は意識を取り戻した当初、五感の機能が働いていなかった。そこで、担当していた脳外科医達は、日本でも、世界でも最先端と呼ばれる治療を火神の脳に施したのだ。
結果、彼は失われた感覚を取り戻した。半年はかかると言われていたリハビリも、数ヶ月で終えた。以前のようにバスケ選手としての復帰は難しいものの、日常生活に支障が無いレベルにまで運動機能は回復したのだ。
その存在が奇跡だとまで言われていた。
最も、当人の表情は浮かないものだった。それまでの友人との付き合いも急に素っ気なくなり、常に不機嫌そうに口を閉ざしていることが多くなった。周囲はそれを、父親を失い、自身も重傷を負った事故のショックから回復しきれていないのだろうと、そう解釈した。
それは火神にとっては腹立たしい解釈でしか無かったのだが彼らが知る由も無い。もっというと、そんな彼らとの付き合いすら無かったことにしてしまいたいと火神は思っていた。
だが火神に事実を伝えられるはずも無い。
それを言ってしまえば最後、異常者として扱われるのは自分の方だという自覚があったからだ。

頭の中を直接刺激するような、何とも言えない不快感に思わず目を閉じる。最も、一瞬のことだったが。目を開けても、世界は変わらない。そう、何も変わることは無い。
吐き気がするような醜悪な光景をぼんやりしながら火神大我は見ていた。

「ｑあｚｗｓぇｄｃｒｆｖ?」
水色のうねうねした触手の集合体のような物体が己の隣で蠢いているのを、火神は横目で捉える。
「ｐｌ、おｋみｊぬｈｂｙｈｇ！」
黄色い、ぬらぬらとしたヘドロが混ざり合ったようなそれが、けたたましい声をあげるのを火神は不快な思いで聞いていた。
目の前で蠢くのは、火神にとっては嫌悪と不快感しか及ぼさない醜悪な生き物。それだけではなく周囲の世界も又、血と臓物に彩られている。漂うのは腐臭だ。肉が腐り発酵していくような、あるいは排水溝にヘドロが溜まりに溜まったような、そんな鼻をつく悪臭に目眩すら感じる。視界と、嗅覚と、聴覚と、触覚。そして味覚さえも侵されていくそれにえも言われぬ嫌悪を感じながらも、今この瞬間に火神がそれを口にすることは無い。
おかしいのは自分なのだ。
彼ら、かつては友人であったと思われるその生き物にとって、世界はきっとかつての火神が見えていたようなありふれた世界に写るに違いない。色とりどりにものが見える。もう、その光景を思い出すことも出来ないけれど。
「ｑうぇｒちゅいおｐ…！」
緑色の禍々しい色合いのそれがやけに甲高い声をあげていた。醜悪な見た目に反して振る舞いは人間そのものなのがどこかおかしく感じる。ただ気持ちが悪い。
「あｚｓｘｄｇｂｇｈｂんｊｋｌ；」
やけにでかい紫色のそれは、火神にとっての視覚と嗅覚から腐った食べ物にしか見えない何かをを平然と大口開けて食しているようだった。
「ｚｘｃｖｂんｍ、ｐｌ…」
赤黒い血が固まった色のそれは、血をまき散らしながら何かを口にする。それを聞いて、周囲の物体もまた笑う。けたたましく、楽しそうに。火神にとっては不快な音で。
声は全て耳障りで醜悪な雑音に
生き物の姿は全て得体の知れない醜悪な化け物に
そして漂う香りは血と肉が焼け爛れた臭いと肉が腐り落ちるその臭いに
全ての世界は、血と臓物に彩られている。
それが、あの手術後から火神大我が見ている世界の真実だ。
ずっと無言で耐えていたが、とうとうこのノイズと臭いと全てのモノに耐えきれなくなってきた火神はガタリと音を立て座っていた椅子を立ち上がる。

「……悪ィ……そろそろ医者に行く時間だから行くわ」
そう言って鞄を手に背を向け立ち去ろうとした火神だが、がしりと何かに肩を掴まれ、不快感を隠しながらゆっくりと振り向いた。
「いｊんｙｈんｒｆｇｂｄｆｇｈ？」
黄色い生き物が、火神に対して何か声をかけている。やけに甲高いその声を聞いているとそれだけで目眩がしてくる。それは最早騒音だった。急激に脳を揺さぶる音。延々と耳元で騒ぎ立てるその声に、不快感しか感じない。
うるさい俺に話しかけるな触るな近づくな何もいうな…
…言うんじゃやねぇ！
そう叫べたらどれだけ楽だったのだろうか。だがそれをぎりぎりの所で押しとどめ、火神は改めて告げる。
「……べつに……何も心配されるような事なんてねぇ……悪ぃけど……もう行くから」
それだけ言って、振り切るように走り出した。
走っても走っても、世界は鮮血の色に彩られたままだ。

「火神っち……大丈夫っすかねぇ……？なんか顔色悪かったっすけど……」
金髪に金目の、やけに整った面差しの少年、黄瀬涼太が、走り去ってしまった火神を見ながらそう呟く。

「今日がというよりも最近ずっとですね。……もっと言うと事故に遭ってからはあまり変わりません」
水色の髪の少年、黒子テツヤが、無表情ながらどこか困ったような顔をして言った。
放課後の教室。
グループ課題の為と言いながら仲の良い友人同士で話していただけの、たわいも無い時間。課題に関係あることないこと、適当に喋っていた。だが先程まで何も言わずにそこに佇んでいた少年一人が突然居なくなってしまったことで奇妙な沈黙が場を支配する。

「もう、無理に火神を誘わない方がいいのか……？」
鮮やかな赤色の髪を持つ少年、赤司征十郎が、憂いを帯びた表情で沈黙を破るが如く呟いた。
「だが……何故あいつが俺達を避けるのか事情を知りたいのだよ」
深緑の髪色を持つ少年、緑間真太郎は眉根を寄せたまま眼鏡のフレームを押し上げ、いった。
「でもさー……聞いてもおしえてくれるのかな……がみちん……」
紫色の髪を持つ大柄な少年、紫原敦はお気に入りのチョコバーを囓りながらどこか途方に暮れたような顔で言うと皆が押し黙る。

彼ら五人と火神大我は、仲の良い友人だ。
いや正しくは「だった」と過去形で言うべきだろうか。
クラスも同じ、部活も同じ。よく、つるんでは遊んでいた。優等生と問題児が混ざり合う不思議なグループ。周囲からのそんな認識にも関わらず彼らは仲が良かった。
半年以上前、火神大我が凄惨な交通事故に遭うまでは。
離れて暮らしている父親と久々に会うのだと、そう言って出かけて行った矢先の惨劇だった。結果、火神の父は死に、火神だけが生き延びた。長い間、集中治療室に入っていた火神は、父親の葬儀に出ることも叶わなかった。彼が意識を取り戻した頃には、父親は小さな箱に収まっていた。
母親は早くに死別していたから他に家族は居なかった。
だから火神大我は名実共に、一人になったのだ。
勿論入院中から皆が火神を見舞ってはいたが、その頃から彼の周囲には常に薄氷が張り巡らされているのかの如き、明確な拒絶の意志を感じた。きっと事故のショックから抜け出せないだけなのだろう。そう思ってはいたが、彼が学校に復帰してからも状況は変わらなかった。
火神大我は彼らとの付き合いを拒み、疎んでいる。
そんな素振りすら日常的に垣間見えるのだ。それは先程の黄瀬を突き放すような物言いからして明らかだった。
「……でも、火神くんは本当に人が変わってしまったみたいです」
静かにそう言うのは黒子だった。
「事故の後遺症で人格に変異が見られるという症例も無いわけでは無いが……何かひっかかるのだよ」
「前みたいにバスケが出来なくなったのがショックだった……だからバスケをやる俺らと関わりたく無いとか……」
「だがそもそも火神はボールに触れてもいないぞ。退院してからな……三度の食事よりバスケを優先する勢いのバスケ馬鹿だった火神と同一人物だとは思えないぐらいにだ」
緑間が、黄瀬が、赤司が口々に言っても明確な答えは見いだせない。
「……どーしたらいいんだろうね」
紫原のその呟きは、皆が同意出来るものだっただろう。
特別な関係は望まない。以前のように親しい友人関係に戻りたいだけなのに、何故拒絶されるのかがわからない。事故の直前に彼とトラブルがあったわけではなく、何らかの不和を抱えていたわけでは無い。
以前のように、強面に似合わず素直さとお人好しぶりを垣間見せる「彼」に、もう一度出会いたかった。
それが彼らの理屈であり、彼らの願いだった。
だから彼らはわからない。
見るものも聞こえるものも違えてしまった火神の願いを、思いを、くみ取る事は決して出来ないのだと。
誰も、気が付くはずもなかった。

「えdtyfgほいkんj?」
目の前の物体が、何かを問いかけている。もう醜悪なノイズにしか聞こえないそれの言葉を探る。表情を変えないことにももう慣れた。そうでなければ、この異常そのものの世界では生きられないから。
「……特に問題はないです」
何の感情も浮かべずに、火神はそう答えた。
火神にとっての世界は、血と肉と、臓物で彩られている。それは場所がどこであれ、恐らく本来は白で囲まれて居るであろう、この診察室でも変わらない。
感覚を遮断する。
何も感じないように意図的に。そうすれば、まだマシだった。

「学校ではどう?特に、変わりはないかい?」
「ええ、何も」
淡々と答える少年を見て、氷室辰也は内心溜息を吐いた。
氷室はこの大学病院で心療内科の医師をしている。そしてここ最近彼の頭を悩ませるのは目の前の少年、火神大我だった。白いブレザーの制服に不釣り合いな大人びた容貌。表情が変わればまだ子供っぽく見えるのだろうが、一切表情の変化が無いため、不自然なまでに硬質な雰囲気を周囲の人間に与えている。
全てを拒絶している。それが相応しい表情だ。

「火神くん。君が受けた手術は……治療法は、随分と革新的なものだった。もちろん、世界レベルでだ。だからこそ、僕らは君の術後ケアに重点を置いているんだ。もし君に何らかの障害が出たときはこの治療法そのものを見直さなくてはならない」
「……何も無いっす」
氷室の問いかけに対し、僅かな沈黙の後に火神はばっさりと切り捨てるかの如き勢いで答えた。
そうして火神大我は、そこで初めて表情らしいモノを見せる。どこか皮肉気なその表情は、十代半ばの少年が抱くには不釣り合いなものだった。
「先生達には……感謝してる。じゃなかったら俺はきっと……ベッドの上で寝たきりだった。五感を失って起き上がることも出来なかった。だから、これでいいんだろ。……治療法を試せて、良かったな」
どこか投げやりなその言葉に氷室は思わず息を呑む。そして同時に強く感じる。
この少年の心理療法は不可能に近いと。

心理療法は特にセラピストと患者の相互的な信頼関係があって初めて成立する。どちらかが心を閉ざせば、それは限りなく不可能に近い物へと変質する。だから、今の状態の火神大我を根本から治療するのは酷く困難な事であった。本来であれば心理療法士が当たるべきケアを医師である氷室が行っているのは、手術の頃から彼を知っている氷室であれば、少しは違うのではないだろうかと期待されているからだが、残念ながらそれに応えるのは無理そうであった。

「氷室先生は以前この病院にいた、原澤教授という人を知ってるか？」

診察時間も終わりにさしかかろうとしたときに火神が言ったその名前に、心の中で動揺を感じながらも氷室は言う。

「原澤先生は半年以上前にここを辞めたよ。……どうして今更そんな人の事を尋ねるんだい？」

「辞めた、のか？」

「一身上の都合でね、行き先は俺も知らない」

自主的な退職と言われているそれが、事実とは異なることを氷室は知っている。だがそれをこの少年に言うつもりは無かった。

「わからない、ですか？」

「どうしてそんなに原澤教授を探すんだい？君が入院した頃に教授はもういなかった。接点も何も無いだろう？」

氷室がそう言うと、そこでようやく火神は口元だけで笑ってみせた。この病院で治療を受けるようになって何ヶ月も経つがそんな顔を見るのは初めての事だ。

「……教授の親戚の人に、頼まれたんだ。どこにいるのか、探して欲しいって」

「……親戚……？」

そこで改めて氷室の心中に疑問が湧く。

あの変わり者の教授は早くに両親とも亡くなり、近しい親戚付き合いをしている人間はいないとの話だったはずだ。兄弟も居ないと本人が言っていた。

では誰が、この少年にそれを頼んだというのだろうか。

「残念だけど、俺は彼がいまどこでなにをやっているのか知らないよ……お役に立てなくて悪かったね」

氷室がそう言って首を横に振ると、火神はじぃっと何の感情も浮かばない目で氷室を見ていた。探るようなその目に寒気すら感じていたが、やがて火神は諦めたかのように視線を外した。

「そう、です、か」

どこかたどたどしい声音と共に火神大我は立ち上がる。

「……次の診察は一週間後……忘れないでくれよ」

「はい」

そうして火神は、振り返る事も無く診察室から出て行った。その瞬間の火神の表情が、何かから解放されたかの如き微笑みを浮かべていたことには、誰も気が付かなかった。

無機物までもが赤い肉と臓物で描かれる。だから火神は事故の後から電車に乗るのが苦手になった。二駅程度ならばまだ歩いた方がましだった。
それに家に帰れば、彼がいる。
そう考えると、自然と火神の心は躍った。

最初は一家三人で、その後は父親と二人で暮らしたその家は火神にとっては幼い頃から慣れ親しんだはずのものだった。だけど今はそれさえも酷く醜悪なものにしか見えない。白かった家の壁は赤黒く染まり、父親に頼まれて手入れしていた庭は、醜悪な臭いをまき散らすだけの場に成りはてた。
だけど火神は家で待っている彼を思い、そうして逸る心を抑えきれないまま玄関のドアを開けた。
「……ただいま」
「おかえり！大我！」
火神がそう言うとぱたぱたという軽い足音と共に、ちょこんとした人影がやってくる。
大柄な火神と比較しても頭二つ、三つ程度は低い身長。
青い髪に、ややつり目がちな青い瞳。
白いTシャツとハーフパンツを身に纏った浅黒い肌の、少年だった。

「遅かったから心配したぞ！」
「悪い……歩いて帰ってきたからな」
変声期特有の微かに高い声音。されど、不快ではない。むしろ今の火神にとっては彼の存在は癒やしそのものとも言えた。声も姿も、その全ても。
「今日はテレビ？見て作ってみたぞ！大我が気に入ったらだいきはうれしい！」
「ありがとな……だいき」
そう言って火神が抱き寄せると小柄な少年は心底楽しそうに、笑った。

全てが血と肉と臓物と醜悪な何かが彩られたのが、今の火神に見える世界。
その世界で唯一、かつての自分が知る人間と同じ姿を写す少年、それがだいきだった。
だいきといることで、火神はまだ自分が人間であると、そう思う事が出来たのだ。
その存在は、火神にとっての救いそのものだった。

第二章　邂逅

火神大我がだいきという少年と出会ったのは、まだ火神が病院に入院していた頃だった。
交通事故で死にかけるほどの重体となり（聞けば鉄骨が体に突き刺さっていたらしい）当人の知らぬ間に五感の回復手術とやらを受けた火神が一番最初に取り戻した感覚は聴覚だった。そこで自分の現状と、父親が死んだという事実を知ったのだ。
その頃はまだ、人間の声が聞こえた。だから自分の状況も、馬鹿なりに理解することが出来た。最初に回復したのが聴覚で良かったと今では思う。きっと視覚が一番最初に回復していたら、発狂するしか無かっただろうから。
今でも火神はそう思っている。

そして、覚えている。
何も見えなかった視界が、少しずつ、開けていく。日の光を感じる事が出来るのか、楽しみだった。
だけど実際に目にしたものは、血と臓物に彩られた赤い世界だった。
そして己の側に立っているのは、到底人間とは思えないような、醜悪な生き物。
「……あ、あ……ああああああああああああああああああああ！」
目で見たものが信じられなくて、火神はただみっともなく叫び声を震わせることしか出来なかった。混乱のただ中において、それが人間なのだと判断出来たのは、まだ聴覚がそれの放つ声が人間の声として捉えたからだ。だから、それが、あまりにグロテスクな生き物が人間なのだと認識出来たのだ。火神の動揺は突然の視界の回復に混乱しているのだと、そう判断された。
夢なのだと思いたかった。このあまりに生々しい光景が現実なのだとは思えなくて、きっと目覚めれば現実が待っているに違いないと、夢にすら、縋りたかった。
やがて視力に続き、聴力も、味覚も嗅覚もおかしくなっていった。
聞こえていた声は全て醜悪なノイズに、感じていた香りは顔を背けたくなるような悪臭に、そして、何を食べても美味しいと思えることすら無くなった。
日替わりでやってくる色とりどりの気味の悪い生き物は自分の友人なのだと、思いたくも無かった。いや、彼らは何も変わっていない。変わってしまったのは、火神のせい

だ。この事実を誰にも言うつもりが無かったのはきっと、信じてはもらえないと思っていたから。それに尽きる。それか更なる手術を加えられるか、異常者として一生を病院で過ごすかのどちらかしか無いのだろうと、無い頭で必死に考えたからだ。

日々やせ衰え、眠っている時間が長くなった。眠っているときだけは悪夢のような現実から逃れられたから。目に見えるものが、現実だなんて思いたく無かった。

そんな頃だった、だいきと出会ったのは。

日がな一日寝て過ごしてばかりだった火神はその晩、ふと枕元にある気配に気が付き、ゆっくりと目を開けた。

「……あれ？……驚かないのか？……なーんだ」

ベッドサイドから、火神をのぞき込んでいたのは暗闇でもわかる、浅黒い肌に青い髪と青い瞳を持つ、少年だった。そう、少年。

五感が回復してから初めて見る、正常な人間の姿が信じられず、火神は思わず目を見開いて少年を見る。すると少年は居心地悪そうに視線を逸らす。

「驚かそうとしたのは悪かったけどよ……そんなに見ないでくれよ」

ぷうっと頬を膨らませた顔はまだ幼い。十代前半ぐらいだろうか。

「あ、ああ……悪い」

そう言いながらも火神は目の前の少年から目を逸らすことが出来なかった。

姿だけでは無い。少年の声は確かに涼やかな声音で火神の耳に届く。あの聞くだけで頭痛を及ぼすようなノイズでは無い。

人間の声、人間の姿。事故に遭う前は当たり前のように見聞きしていたそれに、思わず目を奪われていた。

「もう、行くから。起こしてわるかったな。じゃ」

「……ま、待ってくれ！」

あっさりと立ち去ろうとする少年に思わず声をかけると、白いハーフパンツと白いシャツに身を包んだ彼は怪訝な顔をしながら首を捻る。

「……なに？」

「……少しで良いから……手ぇつないでくれないか」

火神がそう言うと少年は、驚いたように一瞬だけ目を見開いたが、やがて恐る恐るその手を火神に向かって差し出した。構わないと、了承したと、そういうことだろうか。

自分よりも小さいその手に恐る恐る、触れる。

それは少し冷たいけれど、だけど、確かに温かい。久しぶりに感じた人の温もり。自分はまだ、人間なのだと、感じる事が出来た。

「なんで、ないてるの……？」
「……っ……ふ…う……！」
気が付けば、火神は子供のようにぼろぼろと涙を流していた。見知らぬ少年の眼前だということにも構わず、されど握ったその手を離さず、ただ、泣き続けた。少年もその手を振りほどかなかった。

朧物と鮮血に魅入られた世界。
だけど、その少年の周囲だけは、かつての自分の日常を感じさせてくれるのに十分過ぎるものだった。

「俺は……事故に遭って、その治療のために手術をした……だけど、その後遺症で……おかしくなったんだ」
「おかしくなった？」
火神の手を振りほどかなかった少年は、恐る恐る泣きじゃくる火神の頭に手を乗せてぐしゃりとかき回す。それがぎこちなくて、温かくて、涙は引くどころか増していくけれど、火神はその息を整えながらも少年に伝える。
「……世界が……真っ赤に見えるんだ。血と、朧物と…なんつーのか…すげぇ気持ち悪い。人も、化け物みたいにみえるし、言葉だって人間の言葉に聞こえない、匂いだって全部気持ち悪さしか感じない……だけど、お前だけは、人間に見えるんだ」
「……おれが？」

そう言って青い髪の少年はきょとんと瞳を瞬かせる。火神はそれを見てゆっくりと頷いた。
「だから……お前さえ良ければ……また、ここに来てくれないか？俺が話を出来るのって……お前だけなんだ……」
「……ふーん……そうなんだ。いいよ。でも、夜にしか来られない。それでいいなら来るよ」
そう言って少年はどこか悪戯めいた笑顔を見せる。猫のようなその笑顔は少年と言えども大層可愛らしい。
「あ、ありがとう。……俺は火神。火神大我。お前の、名前は？」
「だいき。とうさんは、そうよんでた」
そう言ってだいきは又、にこやかに微笑む。
火神にとってはその笑顔が、その存在が癒やしだった。

約束をしてから毎晩、だいきは火神の元へとやってきた。それも上手い具合にナースの巡回が終わったような隙を見計らって。彼が来ると血まみれの世界が安らぐ。一日の中で彼と過ごすことのできる夜の時間だけが火神の中の、癒やしだった。
色々と話を聞いて驚いたが、だいきは何と入院患者では無く病院の中に住んでいるのだという。
「とうさんが、かえってこなくなった。だから、探しに来たんだ」
「だ、だっていくら子供とは言え人目もあるだろ？」

火神が困惑しながらそう問えば、だいきは自信満々に胸を張ってこう言った。
「意外とあるんだぜ？隠れることが出来る場所……大我は……でかいから無理かもな」
「……まぁな」
子供特有の柔らかな印象そのままに、くるくると変わる表情を見ているのは飽きなかった。楽しかった。彼と居れば、自分がまだ人間であると、そう思えた。だから最初は真面目に取り組む気持ちもなかったリハビリにも真剣に取り組むようになった。世界は相変わらずグロテスクなものばかりだったけれど、毎晩自分に会いにきてくれるだいきがいると思えば、どんなことでも耐えられた。
そうして火神は半年はかかると言われたリハビリでは三ヶ月で退院を指示されるほどの回復を見せた。

退院が翌日となった夜、火神はだいきに尋ねた。
「だいきは、いつまでここにいるんだ？」
「そうだなぁ……とうさんのてがかりもないけど…どこにもいけないから……ここにいようかな、暮らすのにはこまらないし」
そう、何てこと無いように、彼は言った。
ずっとだいきがここに、病院にいるのであれば、退院する火神は彼と会えなくなってしまう。少なくとも、今までのように毎晩語らうことは出来ないだろう。

だから、火神は意を決してだいきに言ったのだ。
「だいきさえよかったら、うちにくるか？」
「大我の、いえ？」
予想もしていなかったというように、瞳を瞬かせながらだいきは呟く。
「うん…俺の家、もう両親も居ないし、一人だけだから…部屋も余ってる……お前が良ければだけど……」
「…………」
火神がそう言うと、だいきは珍しく何かを考え込んでいるような素振りを見せる。
当然か。元々彼はいなくなった父親の手がかりを探すために、ここに来たのだから。全く何も関係の無い火神に請われても、首を縦に振るとは思えなかった。
「お前の親父さんのことは、俺も協力する。やれること、限りがあるけど……探すから。おまえといっしょに」
「大我が？ほんとうに？……いっしょに……？」
無垢な瞳そのままにだいきは問い、そして火神は頷いた。
一度言った以上、約束を違えるつもりは無い。それだけの労を持ってしても、自分を人間だと感じさせてくれるこの少年を手放したくは無かった。だから、縋りたかった。その存在に。

「……一晩、考えさせて」

ぷるぷると首を横に振るとだいきはそれだけ言い、いつもより早めに火神の病室を出て行ってしまった。だいきがいなくなった部屋は相変わらず血の匂いが蔓延し、視界から入ってくる情報も全て赤黒く塗りつぶされていった。

そうして翌日、友人達と思しき生き物の付き添いの元、火神は長い入院生活を終えて退院した。妙に色とりどりなそれらは、かつての友人なのだろう。その姿形は全くもって火神の記憶にある彼らの姿とは似ても似つかないが。

病院を出る際に、ふと後ろを振り向く。

病院の建物ですら、火神の視界の中では真っ赤に染まる。腐臭と臓物それで塗りたくられたような惨たらしい図。どこかにあの小柄な人影はいないかと思ったけれども、視界の中はグロテスクな生き物が蠢くだけであの青い子供を見つけることは出来なかった。

友人と思しきモノに別れを告げ、火神は家に入る。

数ヶ月離れていた家はやはり見慣れたものとは違っていた。いや家は変わっていないのか。変わったのは、火神の世界なのだから。

数ヶ月ぶりに足を踏み入れた家は掃除もしていなかったせいか、酷くほこりっぽかった。だが、この血と臓物で塗り込められた世界の中でそれは気にするような事でも無かった。

廊下も、リビングも、台所も、火神の視界では赤黒い生き物が這い回っているようなそんなグロテスクな状態にしか見えない。その思考を打ち切るかのように、二階にある自室に足を踏み入れる。もう、とにかく、寝てしまおう。寝てしまえば一時的に、この悪夢のような現実から逃れられる。彼と出会う前の日常がまた戻ってきただけのこと。

そう考えて、火神は部屋のドアをあける。

ギィっとそれだけは前と変わらぬ音がした。

「……だい、き？」

やはり赤く染まって見える、さして広くはないその部屋の中。ベッドだけが広いのは急激な成長期を迎えた自分のために亡き父が揃えてくれたからだ。そのベッドの上に膝を抱えて座っているのは青い髪に、青い瞳と浅黒い肌を持つ少年、だいきだった。

「だいき？……なんで、ここに……？」

一体どうやって、鍵が掛かっていた家に入り込んだのか、いやそれよりもいつやってきたのかという疑問が胸を過ぎった。

「大我は……いっしょにいてくれるのか？……とうさんみたいに、いなくなったり……しない、か……？」
疑問の言葉はあったけれどどこか不安げに火神を見上げるだいきを見ていると、そんな言葉はかき消えていた。
恐る恐る近づき、その手に、触れる。
体をそっと抱き寄せる。
それは紛れもない人の感触だった。人の温かさだった。もう、火神の世界からは失われてしまっていたもの。だいきがそれを思い出させてくれた。
「一緒に、いるよ。……ずっと、いっしょだ」
やんわりとだいきのその体を抱き寄せていたので彼がどんな表情をしていたのかはわからなかった。
「……よかった……」
だけど、火神の言葉を聞いてひどく安堵するような、その声音だけが今も火神の耳に残っている。
世界に一人じゃ無い。一人だけの存在じゃ無い。
だいきがいる。そばにいる。
それが、火神の生きる意味になった。

だいきと火神が暮らすようになって数ヶ月は経つ。
だいきのアドバイスで家中を自分の落ち着く色合いに塗り直した。雨戸を閉めているしカーテンを開けることもない。隣家から様子を見られる事も無いだろう。
そうしてだいきはどこから食材調達してきたものやら、テレビでみて覚えたと言い色々な料理を作っている。残念ながらいずれの料理も火神の口に合うことは無かったが、それでもだいきの気遣いが嬉しかった。
一度家に帰れば食事から風呂から何までだいきと一緒に過ごす。それは決して苦痛ではない。むしろこの狂った世界で生きる火神にとってはこの上ない安らぎだった。
だいきは色々な事を知っていた。博識、というのだろうか。少なくとも火神よりはたくさんのことを知っていた。
「タンポポって花があるだろ。種を風に乗せて飛ばすやつ」
「うん」
「綿毛の種は風に運ばれて、故郷から遠く遠く離れて、もしかしたら草木なんか一本も生えてない砂漠に落ちるかもしれない。ただ一粒だけの種でも頑張って育って増えて、いつかこの土地が一面のタンポポ畑になるまで頑張ろうってそう思うかもしれない。なぁ、大我はそんな風にタンポポの種が心を決めるとしたら、どんなときだと思う？」
だいきの言うことは、難しくてよくわからない。だから火神は素直に問う。

「それは？」
だいきは優しく微笑んで、火神の頬に手を差し伸べた。
「それはな、その砂漠にたった一人だけでも花を愛してくれる人がいるって知ったとき。タンポポの花は綺麗だね、って、種に話しかけてくれたとき。……そういうもんなんだよ」
だいきはいつでも変わらない子供の姿なのに、それを話す時だけはひどく大人びて見えた。

そして、誰にも言えないし、伝えるつもりも無いのだが、だいきは毎夜、火神を抱く。子供の姿そのままで。どこにそんな力があるのかわからないが、少なくとも、彼と暮らすようになってからは毎晩だ。最初はそれに抵抗していたが、悲しげなだいきの顔を見ると何も言えなくなって、結局彼の望むままにさせていた。
だいきの年も火神は知らないし、知るつもりもない。世間的には犯罪だと呼ばれるような年であるのかも知れない。だけどだいきが己という存在を求めるのであれば、それに答えたかった。彼という存在に縋りたかった。愛しかった。隣にいるだけで、良かった。

「……そろそろかなぁ」
「なにが……？」
事故で付いたという胸元の、変色した疵痕にだいきが触れたのは、毎日のように行われていた性行為が終わった後の事だった。
「これがあるから、だいきは大我とつながれる」
そう言ってどこまでも優しい手つきで疵痕に触れる。
「これが……？……事故で付いた疵痕だぞ？」
父親の運転する車で遭遇した交通事故。
運転席にいたはずの父親は原形を留めておらず最早肉片と骨を探すのがやっとの状態だったと聞いた。火神にしてもトラックに積まれていた鉄骨が突き刺さるような重傷だったと聞く。最もそれを聞いたのは意識が戻ってからのことで、どっちにしろ父親は最早小さな箱に収められている状態で、火神の胸には消えない疵痕が残ったのだ。

「そう、でもこれで大我はだいきの『雌』になった」
姿形は子供そのままなのに、どこか妖艶な雰囲気を漂わせながら疵痕からその手を離さずだいきは呟き、わらう。
「『雌』……？」
「……こんど、おしえてあげる」
にっこりとだいきは笑う。子供らしくないその笑み。なんというか、それは日頃の雰囲気からはアンバランスで、他者を圧倒するようなそんな笑みだった。

やがて意識を落とした火神は気が付かなかった。だいきが、大我のそれに触れながら呟いていたその言葉に。

「……生まれるのかなぁ、楽しみだな……」

その言葉の、意味も、だいき以外にはわからない。

「……こんにちはー火神っち？」

その日、黄瀬涼太が火神大我の家を訪れたのは、無断欠席をした火神に宿題のプリントを届けるためだった。折しも部活は休みでも他の四人は皆、生徒会やら委員会やらで身動きが取れず、何の委員会にも所属していなかった黄瀬がそれをすることになったのだ。

火神の家に行くのは初めてではない。だから、迷うことも無かった。だがかつて通い慣れた家はその姿を変えていた。手入れをしない家というのは人が住んでいてもここまで姿をかえてしまうのだろうか。

まるでお化け屋敷のようになってしまった荒れ果てた庭に視線をやりつつ、チャイムを押すが音は鳴らない。仕方なく玄関のドアを引くと、それは難無く開いた。

『…オカエリー！』

「……っ…だ、誰ッスか？」

玄関をのぞき込むと、火神が常日頃愛用していたスニーカーが無くなっていた。と言うことはどこかに出かけているらしい。だがそれよりもドアを開けた途端に聞こえた声。人間の声じゃない。ノイズが掛かったような、変声機を通したようなくぐもったその声。

火神の声ではない。では、誰が、一人暮らしである火神の家に居るというのだろう。

「誰か、いるんすかー！？」

玄関先で声をあげてみても、何も返っては来ない。だが、水音がしたので恐らくは台所に誰か居るはずだろう。黄瀬は意を決してその中へと足を踏み入れた。

台所はいつか見た光景とは様変わりしていた。

一人暮らしの男性にしては手まめで料理好きだった火神は、似合ってないと言われながらも手入れはまめだったし、作るものも美味しかった。父子家庭という家庭環境がそうさせたかもしれないが、年齢には似合わないほど家事もしていたと思うのに、黄瀬の目の前にあるのは、数多の赤黒いものがこびりついたシンクだった。

「……これ……血？」

ガス台の上には先程まで火にかけていたと思しき鍋が、火を消し止められた状態でそのまま置いてあった。中は怖くてみれらなかった。火神はいない。

ではだれが、これを作ったというのだろう。
そして黄瀬は雨戸を閉め切りカーテンも閉められているせいか中の様子がわかりづらいリビングへと向かう。かつてはここで遊んだこともあった。だから電気のスイッチの場所も覚えていた黄瀬は、それを押した。

「な、なんだよ……これ……！？」

それは室内でありながら、赤と青に塗りたくられた異様な光景だった。
ソファを初めとする家具も、テレビも、壁も、天井ですら全部が赤と青に塗りたくられている。むしろそれにぬられていないものが無いのでは無いかという勢いだった。

「火神っち……なんで……こんな……」
様子がおかしいのには気がついて居た。だけどいつか、自分たちの知る彼に戻ってくれるんじゃないかと心のどこかで願っていた。だけど、これは、この部屋は到底正常な人間が生活している場だとは思えなかった。

とりあえず、誰かに連絡しよう。そう思い制服のポケットから、黄瀬は携帯を取りだし、メールを打つためにディスプレイに触れる。

ぴちゃ……ぴちゃ、ぴちゃ……

「っ……！？」
携帯のディスプレイに滴り落ちるのは赤い液体。恐らくは血のようなそれに驚き黄瀬は思わず携帯を手放してしまう。そして床に落ちたそれを手に取ろうと腕を伸ばした瞬間、天井から異様な音を発する何かが落ちてきたのを感じた。そしてそれが、己の体にのし掛かるのを。

「……あ……わ……」
突然の事に対処が出来ず、身を固まらせることしか出来ない。
そうして、刃のようなそれが己の首筋に触れたと思った瞬間、黄瀬は激痛と共に声にならない声をあげ……そうして彼が最後にみたものは、青。
青としか形容の出来ない何かを見て、そのまま何も考えられなくなった。

『シッパイ……シチャッタ？』

不気味な声音のそれが、子供のような口調でもう動かなくなった人間を、黄瀬を見て、けらけらと楽しげに笑い出したことも、既に事切れた黄瀬は知らなかった。

第三章　萌芽

その時の火神は不愉快だった。故に不機嫌だった。

父親が亡くなり、後見してくれている親族からの呼び出しで彼は朝から出かけていた。元を正せば父親の叔父に当たるというその人には、火神の世界が変わる前にも会ったことは無い。だから、彼が元々はどんな顔をしていたのかも、火神は知らない。何をやっている人間なのかも、知る気は無かった。

「yふhgjkbじょぃhjkd」

ただ目の前で奇っ怪な姿を晒し、自分に話しかけるそれが恐らくはその親族なのだろう。どぶのような醜悪な色と、ぎちぎちとその体が震えるのを火神はただ、淡々とみていた。調子はどうだ、と聞いてきているようだ。

「……大丈夫です」

病院であの氷室とか言う医師を相手にしている時のように、火神は何事も無い風を装って、そういった。言って信じられるはずもない。己の目に映る世界は、既にグロテスクなものしか写らないのだ。たった一人の少年以外は。

「…dfyhvbkjlj;k。jぉ。」

何やら動きながらぬらぬらとその表面が湿っているのを見た。調子が悪いのであれば大叔父が気に入っているどこかにつれていくが、という話らしいが丁重にお断りする。

この世界は醜く、歪んでいる。

正しくは世界をそう感じる火神の五感が狂っているのだろう。視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚全てが

世界にとっての異物は、火神の方なのかもしれない。いっそ父親と一緒に死んだ方が幸せだったのかもしれない。父親と一緒に、火神大我であったものの欠片すら無くなるぐらい、ただの肉片になってしまった方が良かったのかも知れない。だけどあそこで死んでいたら、彼には出会えなかった。

狂った世界で、唯一安らぎを感じ、愛したいと思った少年、だいきと。

だいきがいなかったら、あのまま現実に目を背けて眠り続けていたのかも知れない。あるいはこの世界に耐えきれなくて己の死を選んでいたのだろうか。いずれにしろ、だいきという少年は、火神にとっては愛すべき対象であり、愛をくれる希有な存在であり、火神大我が火神大我という人間として生きるには必要不可欠な存在であることに関しては疑う余地も無かった。

結局、大叔父の話とやらは大した事も無いのに夕方まで引き止められた。いつもであれば既に帰宅してだいきと共に過ごしている時間であるというのに。苛立ちを感じながら帰路を急ぐ。家の外観はいつもと変わらない。逸る心そのままに玄関のドアを開けて、そして言った。

「ただいま」

だがいつもであれば。おかえり、と迎えに出てきてくれる彼が来ない。だいきが、来てくれない。

「……だいき？いないのか？」

だいきが一人で出かけることが無かったわけでは無い。だがそれは夜に限定されていた。火神が寝静まったような頃に出かけて行き、そして朝には隣にいた。父親を探す、そのための行動なのだと思っていた。

「だいき？」

廊下を歩きながら、リビングを目指す。その内に火神は気が付く。リビングに近づけば近づくほど、甘い、花のような、例えようも無い甘美な香りが漂ってくることに。そして火神は、リビングと台所に繋がるそのドアを開ける。

だいきはいた。

リビングでしゃがみ込み、何かを手で持っていた。ひどく集中しているのか火神が近づいても気が付く気配が無い。

「だいき？……ただいま」

しゃがみ込んで、彼の肩に手を置いてそう話しかけると、不自然なぐらいその肩が跳ね上がった。そして火神を見るその表情は、驚愕を絵に描いたようなものだった。

「た、大我……？おかえり、なさい……」

「？……だいき。何か食べてるのか？」

「！？」

火神がそう言うとだいきはそのまま身を強張らせた。何故、彼がそこまで緊張し、怯えているのか、火神にはわからなかった。

火神は、だいきが何かモノを食べている場面を見たことがない。火神が食事をしていても、もう済ませたと言うことがほとんどで、食卓を囲んでいても、だいきが作ってくれる食事を口にしても、一緒に食べたことはこの家で暮らすようになってからほとんどなかった。

だから、単純に興味があった。だいきが口にする食べ物が、どんなものなのか。

「それ、ちょっと貸してくれるか」

だいきが手に持っていたそれを指さすと、彼は怖々と火神の手にそれを置く。

赤いそれは、されど決して嫌な赤では無く林檎のような。そう、かつては普通に見えていた果物のようにも見えた。

何のためらないもなく、それを口に含むとだいきが大きく目を見開くのが見て取れた。
　食感は軽い。本当にかつて口にしてた果物のように甘やかで、そして何よりも香りが良い。あの事故に遭ってから初めて、美味しいと思える食べ物だった。
「……これ、美味いな」
　かじりつき、咀嚼を続ける火神を、だいきはぽかんとした顔つきで見ていた。
「ほ、本当にか？……嫌じゃ……ないのか？」
「うん。普通に食える……っていうか……美味い」
　口にした途端に甘い香りが口一杯に広がる、そしてみずみずしい食感に火神は虜になりそうだった。久しぶりに感じる美味という感覚に、嬉しさの余り、目眩がしそうだった。
「……なーんだ、そうだったんだ！大我も、だいきと同じのがすきなんだな！」
　そう言ってだいきは、先程の、緊張状態からくるような強張った表情が嘘のように、とても嬉しそうに笑う。
「これはお前の食事なのか？……悪かったな。横取りして」
「ううん？大我が美味しいって言ってくれた方がうれしいから、いい！」
　そう言いながらだいきもまた手頃な大きさのそれを手に取り、齧り付いていた。
「これ、何か調理してるのか」
　それぞれが、それを手に取り、齧り付きながら呟く。
「ううん。なにもしなくても新鮮なら美味しい。芯みたいなのいがいはぜんぶ食べられるし。冷蔵庫に入れておいてもいいぞ。冷凍したら風味は落ちるかも知れないけど……あーあ、大我がだいきと同じの好きってわかったら最初から苦労しなかったのに」
　ぷうっと膨れて、だいきはそれを口にする。小動物のようなそのそぶりが酷く可愛らしくて、それを見た火神は思わず微笑んだ。
「悪かった……お前の取り分、減っちまうな」
「ううん。だって大我が嬉しい方がいいから、それはいいんだ。……これからは同じもの、食べられるな！」
「……そうだな」

　大我が嬉しいと、だいきは嬉しい。
だいきが嬉しいと、大我も嬉しい。
だから、二人は、幸せだった。

　決してそれが、端から見ると依存と称されるような、他者には理解されようのないものでも。

医師である氷室辰也は考えていた。

退職した原澤教授について、突然尋ねてきた患者、火神大我についてを。

あの二人に接点は何も無いはずだ。なのに何故、彼は尋ねてきたのだろうか。原澤に近しい親族は、少なくとも彼の存在を気にかけるような親族は居なかったはずなのだ。

原澤は氷室にとっては大学時代からの先輩に当たる人間だった。だが、半年以上前におかしくなった彼は、そのまま退職したはずだ。そう、文字通り、おかしくなった。そしてそのまま失踪したと噂で聞いた。最も外聞的にはそんな事実を言えるはずも無く、自主退職との形をとっていたがあれは首を切られたといった形容の方が正しかったのだろう。

その中の噂の一つにに、原澤はある新興宗教にハマっていたと、聞いた事があった。噂半分だったので、聞き流していたが、その宗教名だけは耳に残っていた。火神大我が原澤を訪ねたことで思いだし、それが妙に頭に残っていた氷室は、残業を終えた今、改めてそれを検索していた。

それは一言で言うなれば、異形を信奉する宗教のようだった。

『まことなるひかりさま』なる存在を信じ、その再臨を信じ、活動を続ける団体。ＨＰからわかるのはそれだけでありもっと調べるには関係者から聞かなくてはならないのだろう。『まことなるひかりさま』とは何なのか、原澤はここに所属していたのか。噂が事実であるならば小動物を殺して回っていたというのは何故なのか。

いやそれよりも、彼は自主的に、何の研究をしていたのか。手がかりを手に入れても全容が見えないそれを紐解く鍵が、そこにあるのかもしれなかった。

「もうこんな時間か……」

気が付けばもう既に日付が変わるような時間になっていた。帰宅するのも面倒だと思いながらも渋々と帰り支度をしながら氷室は思いだす。

半年ほど前には、この病院には怪奇現象が多発していたことを。

入院中の患者の枕元に、人間とは思えない異形の生き物が立っていた。最初はそれから始まった。最も幻聴や幻覚などの症状が目立っている患者からの話ばかりで、それはただの錯覚だろうと誰もが思った。だが、巡回中の看護師が、ふと気配を感じて天井を見上げれば青く鋭い光を放つ生き物と目が合った、とか朝になると天井には何かが這いつくばったような跡がある、とか不吉な噂は徐々に聞こえるようになった。夜勤の看護師の数を増やして対応しても、訴えは消えることが無かった。

それどころか、病院に併設されている大学で頻繁に見られていた野良猫の姿が見えなくなった。静かに、いつのまにかその姿を消していった。そして、これは氷室も聞いただけだが、噂では献体の臓器が丸々無くなったこともあったらしい。もちろん内々に処理されたらしいが相当の数のものであったらしく担当の医師が嘆いていた。
最もこれらの事態は数ヶ月前からは治まっている。
大学の周辺ではまた猫の姿が見られるようになったし、巡回時の不審な影も、這いつくばった跡も、消えていった。

だが、氷室の胸には拭えない不安がある。
何故、火神大我の退院と同じくして、病院の怪現象は治まったのだろうかと。ひょっとすると彼は、何か得体の知れないことに巻き込まれているのではないかという疑問があった。
火神大我。
瀕死の重傷を負いながらも奇跡的な回復を見せた少年。
この世界の全てを拒絶する少年。

あの少年が、何かを隠しているのだけは事実だろうと考えていたから。

黄瀬涼太が、行方不明になった。
あの日、火神大我の家に行った日から、ずっと家には帰っていない。一人暮らしをしている黄瀬のその状況がわかったのは、しばらく後の事だった。

「どこに行ったんだ……涼太」
「火神くんは……朝からずっと親戚の家に行って戻ったのは夜で、誰とも会っていないと言ってましたし……嘘ではないんだと思います……」
教室で赤司と黒子は、顔を突き合わせながら重々しくその口を開く。
かつては六人で他愛も無いことを話した空間には今は二人しか居ない。火神は放課後になるとすぐ帰って行ったし、緑間と紫原はある場所へ行っている。生徒一人が行方不明と言うことで学校内は一時騒然としていたが、徐々にその落ち着きを取り戻しつつあった。それを非情であるとは赤司も思わない。そうやって割り切らねば人間は生きていけないからだろう。最も近しい人間にとってはそう簡単に割り切れるものでもないのだが。

ただ、無事を祈ることしか出来なかった。

「赤司くんはミュルメコレオンというものを、ご存じですか？」

気を紛らわせるためかもしれないが黒子が本を携えながらそう言うものだから、赤司は思わず眉を潜めた。
「なんだそれは…また何かの受け売りか？」
「知り合いからずっと昔に教えて貰ったんです。元々は聖書の誤訳から誕生した生き物だそうですよ」
　そうして黒子はその生き物について語り出す。

　ミュルメコレオン
　元々は旧約聖書の誤訳から誕生した幻想生物。
　体の前半身がアリ、体の後半身がライオンだというそれはひどくアンバランスな生き物だった。ライオンの本能故に、アリが好む食べ物が食べられず、されどアリの体故にライオンが好むモノも食べられない。生まれた瞬間から餓死することが決まっているような生き物だった。

「だから、どちらかを失えば生きていけると言われています。アリの部分か、ライオンの部分かのどちらかを消すことで。例えば鳥がアリの部分を食べてしまえばミュルメコレオンはライオンとして生きていくことが出来るのでは無いかと」
「荒唐無稽すぎるぞ……」
「そうですね。僕もそう思います……この話を教えてくれた人は、こうも言ってました」
　そこで黒子はどこか遠くを見るような目で、こう言った。
「もし、僕らの中にもそういう存在がいたら、君はどうする？って」
「そういう存在……？」
「本人は人間のつもりでも、その中で自分でも抑えきれない何かと戦って必死で本能と理性を戦わせている人間って言うのはきっといるんだって言ってました。あの人はアリを理性に、ライオンを本能に例えて言ってましたね。全員じゃ無く、限られた人々はそうやって生きているのだと」
　口数少ない黒子には珍しく、饒舌なそれに赤司は目を剥くが、それでも聞いていた。
「それが人に紛れて、だけど人と同じように生きていくのはきっと難しいのだろう。人間とは何をもって人間と定義するのだと。姿形なのか、それとも、心なのか、魂で見るのか……正直難し過ぎて、子供の頃にはよくわかりませんでした。何か難しい研究をしている人だったようですけど……」
「ミュルメコレオンはわかったが……それが一体何に繋がるんだ？」
「火神くんです」
　火神。
　友人だと、今でも思いたい
　この場においては予期せぬその名に赤司は思わず訝しむように黒子を見た。
「火神が何の関係があると……」

「事故の後から、火神くんの様子がおかしいのはみんな知ってるじゃないですか。あまり何も話してくれないいし、わからないけど火神くんも、何かと戦ってるのかもしれません。見守ることしか僕たちは出来ないし、何もすることも出来ないですけど……待ちましょう。その時を」

じっと、水色の瞳が赤司を見た。物静かなこの少年が、意外に頑固で言い出したら聞かない事を赤司は長い付き合いで理解していた。

「何もせずに、待てと言うのか。お前は」

「火神くんに関しては、です。黄瀬くんのことは……警察も動いてくれてるんでしょうけど……僕たちも探しましょう。わからない事が、多すぎます」

黒子がそう言うと、赤司はしばしの間を置いて、呆れ果てたように溜息を吐いた。

「わかった」

それは諦めなのか、だけど信じたいと思う気持ちなのか、赤司にはわからなかった。

「彼の友達の方から来てくれるなんてね……嬉しいよ。中々話してくれない患者でね？正直医者としても手詰まりだったから」

火神大我が定期的に診察を受けている心療内科。その担当医師である氷室に会いに来たのは、事前に連絡をしていた緑間と紫原だった。

二人に対して椅子に腰掛けるように促しながら、氷室は言う。

「一応情報保護の観点もあるからざっとしか話せない。……だけど言えることは火神大我くんの精神面は悪い意味で安定している。周囲と明確な壁を作ることで自分を保っているんだ。そこに君たちも、医師である俺にも入り込む隙は与えてくれない……まぁ、俺よりも毎日彼と接している君たちの方が、知っているかな」

どこか物憂げな表情で語られたそれに緑間も紫原も思わず俯く。

彼らの友人である火神大我が交通事故をきっかけに変わっていったのは事実だった。時間が経てば以前のように朗らかな面を見せてくれるのではないかと思っていたのだが……状況は好転しない。一か八かで火神が通院しているという病院を訪れてみたと、そういうことだった。

「本当はカルテを見ながら話したかった所なんだけどね」

「？……どういうことなのだよ」

「……それじゃー……ないの？」

緑間と、紫原の問いかけに氷室は僅かながら困った素振りを見せたが、こう言った。

「君たち以外にも、火神君のデータを知りたがった存在は居るらしい。……治療記録から何からごっそり全部が無くなったんだよ。それと、ちょっといいかな」
火神の診療記録が無い。
一体それは、誰が何のためにやったことなのか。氷室にも、当然紫原にも緑間にも心当たりなんて無かった。

氷室は酷く真剣な面差しで二人に問いかける。

「……大輝、って名前に、心当たりはないかい？」
「だいき？」
「……聞いたことないよ……」
氷室からの問いかけに二人は首を捻る。すると氷室は少しだけ安堵するかのような表情を見せた。
「そう……なら良いんだ。君たちだけじゃ無い。君たちの友達も、火神君も……知らなかったらそれでいいんだ」
だけど、
氷室はそこで言葉を区切ると、微かな怯えを含んで、言った。
「もし、知って、それに関わったら最後。……二度と引き戻せなくなるから」

「だいき……これ、なんだ」
「うん？大我のちりょうの記録。ちょーっと大我なおしてみようかとおもって」
火神の家のリビング。
火神の正面にぺたりと座り込んだだいきの周囲には分厚いファイルが積み重なっている。夜に出かけたと思ったら随分と長い時間をかけて帰ってきただいきは、その体には不釣り合いな程の多くのものをもって帰ってきた。
「俺を、なおす？」
「そう！だいきはな、こういうのすげーとくいなんだ。とうさんにも褒められたんだから！」
えへんと胸を張るその仕草は年相応に見えてとても可愛い。最も彼の年齢を聞いたことも無いが、それでいいと思っていた。
「すごいな、だいきは」
「だろ！……でもいきなり大我にやるのは……ちょっとしんぱいかな。まだ大きいのじゃやったことねーし」
そうしてだいきは小首を傾げていたが、やがて閃いたというように、きらきらした笑顔を火神に向ける。
「じゃあ、まずはれんしゅうだい！みつけてくるな！」
それはとても愛らしい笑みで、火神にとっては癒やしで、救いで、生きる全てだった。
その言葉の、本当の意味を誰も知らない。
今は、まだ。

第四章　転機

それは、かみだと、だれかがいった。
人の肉体を捨てた、新たなる存在なのだと。
我々の前に姿を現した、神そのものだと。
その日から、それは、「神」になった。

人の姿とは似つかぬものであるにも関わらず、全てを、知っている。
異形の神。
少数の人々は、それを奉り、信望の対象とした。
神はあるときからつがいを欲しがった。
人間は雌をあてがった。
されど、人間の雌に子は孕めなかった。
「人間」では神の子供を孕めない。ならば、どうしたら良いのだろう。
「人間」の方を、作り替えてしまえばいい。
それを言ったのは、神か、人間か。

そうして彼らは待っている。
神の子を孕み、そして生み出す「雌」が誕生することを。

そして神の望む世界に変容することを、願っている。

「とうさんといた家にいってくれない？」
だいきがそう言ったのは、大我が不本意ながらも学校へ行く準備をしていた時だった。
「……何か、あったか？」
だいきの言う父、原澤の家には既に一度行ったことがある。だけど、何も彼の居場所の手がかりになるようなものは何も無かったはずなのだ。
「おれが、持ち出そうとして持ち出せなかったんだけど……二階の、とうさんの書斎。その部屋に物置がある。だけどそこは本当はもっと奥までへやがあるはずなんだ。俺は出来なかったんだけど。大我なら、できるだろ？」
「何をもってくればいい？」
「……なくてもできるとは思うんだけど……ほけん……？みたいな。とうさんがおれのこと書いてた日記があるはずなんだ」
それを持ってきて欲しい。

他でも無いだいきの頼みを断る理由は無い。だから火神は、頷いて、それを受け入れた。火神からの了承の意を感じ取ったのかだいきは、とても嬉しそうに笑った。

放課後。

火神は一人で、原澤が住んでいたという家に向かっていた。一人暮らしだったという原澤の家は火神の家から電車で二駅ほどの場所にある。場所は以前、だいきと暮らし始めた頃に教えて貰って足を運んだことがある。だから、知っている。だが、火神は歩きながらも電車に乗るという事実を考えて頭が痛くなってくる。

全てが血と臓物で写るこの世界には慣れたが、閉ざされた空間、建物はともかく、乗り物となるとまた別だった。狭い空間ではその匂いも、光景もいつも以上にきつく感じる。だから火神は制服姿のまま、歩いてそこに向かうことに決めたのだった。

歩いているうちに、気が付く。

誰かが、後を付けているということに。

火神の目に見えるのは全部が醜悪な異形でしか無いのに、いやだからこそかもしれないが、自分に近づく存在はわかりやすかった。恐らくは学校で自分の近くにいる一人。際だって赤い印象だったから、多分赤司なのだろう。

赤司。名前は赤司征十郎。そんな名前だった気がする。もうその声も、その姿も、記憶の中にしかいないので、ひどく朧気だったのだが。彼が何を目的として己の後を付けているのか、理解は出来なかった。

邪魔さえされなければどうでもいい。

そう思いながら、火神は背後の気配に知らないふりをして、足を進めたのだった。

原澤の家は二階建ての建物だった。狂っている火神の視覚から、その正しい外観はわからないが、周囲との建物の高さを比較して間違ってはいないだろう。

鍵は掛かっていないことは、前に来たときに知っている。

だから火神は臆することも無くその中に足を踏み入れた。

今日は、おかしな日だった。

赤司征十郎はこの悪夢のような日々が終わってくれることを願う事しか出来ない。

黄瀬涼太の行方は相変わらずわからない。そして今日は緑間真太郎も紫原敦でさえも、学校に姿を見せなかった。欠席、とのことだったが二人揃ってというそれに不審感を隠しきれない。メールは送っても返信が無く、何度携帯に電話かけてもそれがつながることは決して無かった。

迎えた放課後。
黄瀬涼太の一件から全ての部活動は休止状態になっており、それは赤司が率いるバスケ部も例外では無い。下校の準備を終えた赤司の目に入ったのは、走り出しはしなくとも、やや慌て気味に教室を飛び出していく火神の姿だった。今日も一日、ほとんど寝たように過ごしていた彼とは何も話していない。友人である黒子テツヤは見守ろうと言ったが、それでも釈然としない思いが残る。

何故火神は自分たちを避けているのか。

そうして、気が付く。揃って連絡が取れない紫原と緑間は、二人とも先日病院に火神の現状を聞きに行っていたことに。結局、何者かの手によって彼の医療記録は紛失しており医師からの情報しか得られなかったとのことだったが…。

気になる。それは本能的な勘だったのかも知れない。

「赤司くん？」

「テツヤ、悪い。今日は一人で帰る」

近づいていた黒子に一声かけて、赤司もまた教室を飛び出した。

そうして探す。

周囲の人間より飛び抜けて頭一つは大きいその姿を。

勘でしか無い。だけど、赤司の勘は良く当たる。

嫌な予感しか、しなかった。

その大柄な背を追いかけて、どれぐらい経ったのだろうか。

火神は学校を出てひたすらに歩き続けていた。時間にして、およそ一時間以上はあっただろうか。その間、何も気づいていないのか、興味も無いのか。後ろを振り向くことは、一度たりともなかった。

そして火神は、住宅街のある一軒家の前に来ると、何のためらいも無く足を踏み入れていった。さすがに家の前にいたら気づかれてしまうかと思い、赤司はその家の出入りが見渡せる近所の公園から見張る。探偵の真似事のようだと思いながら、どうか友が、友達が無事である事を祈った。

以前は六人で、よく遊んだ。

赤司と、緑間と、紫原と、黄瀬と、黒子と、そして火神と。入学してすぐに出会い、クラスや部活の関係もあってつるむようになった。性格も全然違うし、好きなものも違ったけど皆、仲が良かった。そう思っていたのは、赤司だけでは無いはずだ。いつまで続くかわからないけれど、できる限りそれが、皆でいる時間が続く事を望んだのは、愚かな事だったのだろうか。

半年以上前に火神が遭遇した交通事故で、状況は一変してしまったが。

火神は変わった。変わってしまった。

そして今また、状況が変わろうとしている。

黄瀬の行方不明を初め、緑間と紫原の二人と連絡が取れない。これら全て、悪い方へ悪い方へと動いているようにしか感じられなかった。
そんな事を考えていると、火神があの家から出てきたのがわかり、慌ててその身を隠す。やがて完全に立ち去ったのを確認すると、赤司は意を決してその家の前に立つ。
『原澤』という表札のかけられた家は郵便口からはチラシが詰め込まれ、主の不在を物語っている。鍵は掛かっていないのは、先程の火神を見ていたから知っている。
一体火神は、この家の主とどういう関係なのだろう。事故の後から、人付き合い全てを疎んでいるような火神が、新たな人間関係を構築したとは考えづらい。そして事故前はというと、そんな名前の知り合いは火神の口から聞いた事が無い。
「……………」
泥棒の真似事のような事をしている自覚はあったが、胸に燻る不安はどうしようも無く、赤司はその家の中へと足を踏み入れた。
室内は薄暗く、ほこりとカビの臭いが充満していて、赤司は思わずハンカチでその口元を抑える。半年かそれ以上に渡り、人の出入りは為されていないのでは無いだろうか。昼でも暗い廊下をそのまま歩いて行く事に不安を感じた赤司は、鍵束に付けていた小型のライトを照らす。何も無いよりはマシだろうと思いながら、恐る恐るその中へと、進んでいった。
家の中自体はごく普通の作りのようだった。だが、それでも、薄暗い中でもハッキリと見えるそれは異様なものだった。まるで血を拭き取ったかのような、あるいは何かの生き物が這いずったかのような後が廊下と、壁と、天井に絶え間なく続いていた。
「なにかが、いたのか……？」
頼りないライトの光源でこれだけわかるのだ。明るい光の元であればどれだけのものが見えたのかもわからない。ぞくりとした寒気を感じながら、赤司は必死に、歩く。
リビングと台所はしばらく使われていない様子が垣間見えるだけで何も変わった様子は無かった。次いで二階に続く階段を進んでいくと二階には部屋が二部屋あるだけだった。そのうち、階段に近い方のドアノブを捻るとそれは難無く開いた。
そこは書斎のようだった。本棚と、机と、赤司にもわからないような実験道具が置いてある。机の上には数多の本が積み重なっている。本来の持ち主がそうだったのか、それとも誰かが、何かを調べるためにそうしたのかはわからない。そもそも小さなライトではこの家全体を調べるのにも限界がある。そう思ったその時、赤司の持っていたライトは床に落ちていたそれを、照らした。大きなマグライト。誰のものなのかはわからない。ひょっとしたら家主か、そ

れとも赤司よりも先に足を踏み入れているであろう火神のものか……。

「……」

赤司はそれを手に取り、そうして、灯りを付けた。

同時に、見なければ良かったと、心底思った。

本来の主を失ったであろう机の上は、おびただしい量の血痕に塗れていた。

「……これは……」

乾燥の具合からして、昨日今日のものではなさそうだ。だが、これは、尋常では無い。一体誰が、何のために。まさか、殺されたとでもいうのだろうか。

「……っ……！」

それを認識した瞬間、赤司は部屋を飛び出していた。慌てて階段を駆け下り、そうすると少しだけ全身の悪寒は和らいでいったような気がした。いますぐにこの家を出たい。だが、先程調べていない部屋がまだある。二階はもう打ち切るとして一階の奥はまだ見ていない。

これで終わりにしようとそう思いながら、精神的に酷く打ちのめされつつある心を叱咤し、赤司は再び歩き始めた。

そこは古い浴室だった。タイル張りの床に、浴槽。古い以外はありふれているそこの、浴槽の中に、白いなにかが固まっているのが見て取れ、赤司はライトを当てつつ近づく。

そこにあったのは無数の骨だった。

大きさからして人間では無い。犬や猫、ネズミと言った小動物だろうか。いずれにしろ、浴槽の半分以上を埋めるその量は尋常では無かった。声をあげなかったのは、単に目で見たものの衝撃があまりに大きくて、声すら出せなかったからだ。

ずるずるとみっともなくその近くに尻餅をつく。

一体、この家には「何が」いたのだろう。

家中にある、何かが這いつくばったような跡。

二階の書斎で見た夥しい量の血痕。

そして、小動物の骨。

明らかに異常だった。

赤司は驚いていた。放心していたと言っても過言ではない。だから彼は、気が付かなかった。己の背後に近寄る、その存在に。

「人の後を付けてきたのか？……赤司」

どこか冷たさと嘲りを含んだその声の主に、声をかけられるその瞬間まで気が付かなかった。

「知り合いに頼まれた。だから探しに来た。それだけだ」
赤司は何かを言っているようだが、もう何も言いたくは無い、話すことすらしたくない。この奇怪な見た目の生き物が、ノイズをまき散らすだけの存在が己の友だとは到底思いたくは無かった。
赤司が着いてきていることには気がついて居たが放って置いたのはどうでもよかったからだ。そう、どうでもいい。この世界全てが、たった一人の存在を除いてどうてもいいように、赤司という存在も火神の中ではひどくどうでもいいものだったのだ。
なにやら謝っているようだが、謝られる理由がわからない。だから、もう言うな、とだけ言って歩き出した。
だがまた耳障りな声に引き止められ、火神は足を止めざるをえなくなる。今日はもう、大分遅くなってしまった。
はやく、かえりたい。
だいきのところへ、かえりたい。
暖かな笑顔を浮かべてくれる彼の顔を脳に描きひたすらにただそう思う。
「緑間と紫原……？悪ぃけどしらねぇよ。俺だって学校に行ってたし」
そういえば今日はいなかったのだろうか。色とりどりの色が少しばかり減っただけで、火神の目が写す世界の歪さは変わらない。だから赤司に言われるまで二人の不在に気が付かなかった。
「本当にしらねぇよ。黄瀬の時もそうだけど、あの日は一日中でかけてたしプリントだって俺の家にはなかった……しらねぇもんはそれ以上いえねぇ」
それだけ伝えて、火神は赤司を振り切るかのように歩き出す。
今度は、何も、声をかけられることはなかった。

帰りもまた電車に乗らなかったので、歩いて帰った。
ようやく自宅に着いたその頃には、周囲は夜の帳に包まれていた。

「ただいま」
いつもであれば、迎えてくれる涼やかな声が、だいきの声が聞こえて来ない。前にもあった。あれは確か、だいきが食事をしている最中で、それに集中していたからだったはずだ。だが今日は、何があったのだろうか。
ガシャン、バタンという何かを投げつけるような音が聞こえてくるリビングへと火神は足を進める。
そこで火神は見た。

緑色の禍々しい生き物が、だいきの首を絞めようとしているのを。
　小さなその体が苦しげに、呻くのを。

「……てめぇ……！」
　無我夢中の火神が自然と手に取っていたのは、飾り棚に置いてあった灰皿だった。死んだ父親が帰ってきたときだけ使っていたそれは、酷く大きくて、やけに重かった。それを両手で持つと、がむしゃらに、だいきの首を絞めているそいつめがけて殴りつけた。
　それが、なにかくぐもったような声を出していた気がするが、聞く耳を持たなかった。とにかく、だいきを離せと、その一心で殴りつける。
　やがてそれの体がぐらりと崩れ落ち、同時にだいきのからだもまた、ゆっくりと床に落ちた。

「だいき！無事か！？」
「……たいが……？」
　苦しげに閉ざされていた瞳が、それでも火神の呼びかけでうっすらと目を開けると、やがてぽろぽろと涙が零れ始める。
「だいき……どこか……苦しいのか…？」
　火神がそう問いかければだいきはふるふると首を横に振る。

「ちがう…ちがうんだ……なんで……駄目なんだろう…やさしくして……くれなかった……！」
「だいき……？」
　泣きながら、己に抱きつくだいきを抱きかかえながら、火神はその背を宥めるように撫でる。
「……大我とおなじになったら、みんなやさしくしてくれるっておもったのに……！でも……だめだった……ころしあったとおもったら……こんどはだいきのところにきて、ころそうとした……！だいっきらいだ！……大我の……ともだちなのに！」
「俺の、友達……？……どういうことだ……それは……」
　だいきが、何をいっているのかわからない。顔をぐしゃぐしゃにして泣き続けるだいきを宥めながら、火神はリビングに横たわる、それに目を向ける。
　黒に近い緑色の生き物。そうしてよくよく見れば隅の方で、紫色の大きな生き物が、軟体動物のような姿そのままに、横たわっていた。だが、この色は、色合いは、自分の知り合いであるのならば……。
「緑間と紫原……？」
　今日は確かに学校を休んでいたと赤司から聞いていた。彼らが何故、ここに、火神とだいきの家にいるのだろうか。
「だいきが……やったんだ……」
　火神の腕の中、泣きながらぽつりぽつりとだいきが話し始める。

「だいき……お前は……何をしたんだ？」
決して責めるような口調ではなく、ただただ相手を案じるその声音。だいきもまた、それに安堵したのか、ゆっくりと話し始めた。
「たいがを、なおすっていっただろ。でも……練習したかったから……まえにここにきた……きせってやつの携帯使ってこいつら呼んだんだ。……ひとりずつやったらそんなに難しく何て無かった。すぐにできた。……ちょっとだけ……おもったんだ。たいがが俺にやさしくしてくれるみたいに、こいつらも俺にやさしくしてくれるかな、って……」
そこでだいきは一度俯いた。
「たいがとおなじものがみえるようにしたんだ、このふたりに」
「俺と同じもの……だって……？」
ということはこの血と臓物に彩られた世界を見せたのだろうか。
そして同時に思う。何も知らぬままにこの世界を見せられたのであれば、それは想像を絶する恐怖だろう。火神とて、あの頃は聴覚が機能していたからまだ耐えられたが、それすらもないとなると……発狂してもおかしくは無かった。
「どうしてだいきに、そんなことができるんだ？……それに、俺をなおすって……どうやって……？」
火神の問いかけに、だいきは一瞬目を伏せたが、言った。

「だいきには…いきもののつくりを、書き換える力があるだからこの二人の脳を、いじったんだ」
それは静かな、されど悲しみと、狂気を秘めた告白だった。

「……来ていただけるとは、思いませんでしたよ」
「それはこっちもだね。まさか、そっちからコンタクトが来るとは思わなかった」
そう言って未だに白衣を身に纏った氷室辰也は皮肉気に笑う。決して病院の患者に対しては見せないその表情を向けられても目の前の存在は表情一つ動かさない。まるでそうなることが予想出来ていたかのようだった。
「敵に塩でも送るつもりかい？」
「いいえ。僕らも持っている情報は少ないんです。研究資料はあなたが持っているんでしょう？……まぁ上の人間に言うつもりはありません。僕はあくまで末端ですから」
「ならなんで、君は俺に連絡を取ろうとしたのかな？……黒子テツヤくん？」
氷室辰也の前に立つのは、白いブレザーの制服に身を包んだ学生。水色の髪と瞳を持ち、あの火神大我の友人でもあったはずの黒子テツヤだった。

「正直、僕は上の人間の言っていることもどうでもいいんです。ただ、彼が言う、ひかりとひかりが結びついてうまれるというそれが、見てみたかった。『まことなるひかり』とはどんなものなのか。……たとえそれが希望で無くても、絶望に溢れたものでもよかったんですよ」
　そう言って黒子は緩やかに笑った。

「まぁ、俺も知りたいことはある……。で？君の後ろにいるお友達も、一緒でいいのかな？」
「ええ。……彼にも知っておいてもらったほうがいいでしょうね。来て良いですよ。赤司くん」
　何を見ているのかわからない。
　そんな顔で彼ら二人を見るのは、赤司征十郎だった。そうして黒子はまた、薄く笑う。
「では……場所を変えてお話ししましょうか。『まことなるひかり』を信奉する団体と……彼らのやってきたことについてね」

　その声音は、どこか楽しげなものだった。

崩壊の加速は止められない。

誰にも。

そう、誰にでも、だ。

望むのがささやかな幸せであっても、それは、世界を震わす恋になる。

恋の果てに、世界を狂わせる。

歪んだ恋は、全てを巻き込み、そうして止まることを知らない、

第五章　真実

「いきものを、つくりかえる……？」
「そう。だいきにはそれができた。むかしから」
腕の中でぐすぐすと泣き続けるだいきを抱き寄せながら火神は呆然と呟く。信じられない思いで一杯だったが、すぐにその考えを改める。
ありえないというならば、今、火神が見ているこの世界の方が世間的に見ればありえないのだ。それに、だいきは火神に対して嘘をつかない。それは火神がよく知っている。
そうしてそれが事実であるならば、先程火神が殺したあの生き物はかつての友人である緑間で、この部屋に横たわるもう一体も、かつての友人である紫原ということになる。
人を、殺してしまった。
そういうことになるのだろうが、火神の心に焦りは全く無かった。
火神の基準で言えば、彼らは既に、人では無かったからだ。
人は、何を持って人と定義するのだろう。

姿形という意味では、火神の中では、彼らはただの化け物だった。きっと、狂っているのは自分なのだろう。かつての友も世界が全て、醜悪な肉片にしか見えない自分が。だけど、それでも、生きているのだ。

「ひとりをやって、もうひとりをやるのは、簡単だった……でもふたりとも目が覚めて、叫びだしてずっと蹴ったり殴ったりしてて、片方が動かなくなった……そうしたら俺を殺そうとした…なんで…にんげんにみえるなら…やさしくしれくれんじゃないのか…？！…たいがしか、おれにやさしくなんてしてくれない…！みんなきらいだ！」
「だいき……もう、大丈夫だから……俺が、いるから……一人に何てさせないから……な？」
部屋に横たわっている死体よりも、未だに泣くだいきの不安をぬぐい去る方が、火神にとっては大事だった。
この狂った世界で、唯一美しいとおもえるもの。
愛しいとおもえるもの。
決して手放したく無いもの。
だいき。
火神大我が愛する、唯一のもの。
「怖かった、な」
「……たいが……」

優しくその背に触れると、背中に回された腕が、背を掴む手が強さを増す。
だいきの正体が何だっていい。
どんなものであっても構わない。
だから、絶対に、俺から離れていかないでくれ。

狂気に満ちた醜悪なこの世界で取り残される事ほど、心細いものはない。憂いを、嘆きを感じるほどのものはない。
どうか彼の悲しみと恐怖が癒えるように、そして自分から離れていかないように。

ただそれだけを願い、火神はだいきを抱くその腕に力を込めた。

「始まりは……いつだったのか、僕もよく知りません。ただ、ずっと昔から『それ』はいたのだと、聞いた事があります。異形の神『ひかりさま』は常に人類の側に居たのだと、僕は習いました」
夜半過ぎ、某所のカラオケボックスの中で、三人の男は顔を突き合わせていた。
その表情はどこまでも硬い。
これから話す内容を考えれば当然ではあるのだが。

黒子テツヤ。
火神大我の友人でもあり『まことなるひかり』を信奉する宗教団体の教団員である少年は、淡々と呟く。
それを氷室辰也は胡乱な目で、赤司征十郎は呆然とした様子でそれを見ていた。
熱心な信者を両親に持つという少年は知っていた。
真実の一端を。
「異形の神、それは人ならざる姿でありながら全てを知り、全てを教える、作り替える……万能の存在であると言われてきました。十年前までは教団本部に、それはいました。……今は、居ません」
「いない？」
「……ちょうど当時教団内でそれの処遇を巡って、トラブルがあったらしいです。僕も詳しいことは知りません。その現状を憂いたある教団員が盗み出したそうです。そして、それを誰かに託して自殺した。手がかりが掴めたのは半年ほど前。だけど託された当人は神たるそれの居場所を伏せたまま、失踪したそうです。ある教団員は彼の自宅まで行って、神を奪い返そうとしたいしんですが……帰ってこなかった。別な団員が行ったときには肉がそぎ落とされたような骨だけが、見つかった……そういうことです。多分肉は全部食われたんでしょうね。あれは肉食でしたから」
淡々と告げる黒子に、僅かばかりで無い恐怖を感じながら赤司はおののく。

黒子は、そう最初に言った。

異形の存在がいた。
異形はいつからいたのかはわからない。だけど人の形を持たないそれは、人を越えた力を持っていた。そうしていつからか人の言葉を理解したそれを、少数の人間は神と崇め始めた。
異形はいつからか『ひかりさま』と呼ばれるようになった。その姿自体は醜悪で光という言葉とは縁遠いものであったはずなのに、いつしかそう呼ばれるようになっていった。少数の人間が奉っていただけのそれは、いつしか数多の人が密かに信奉するようになっていった。

そうして、異形は願うようになった。
おのれの、つがいである、雌を。
そうすれば、『まことなるひかり』を生みだし、更なる奇跡を可能とするだろうと。

それを聞いた団員は、人間の女を宛がった。だけど、駄目だった。体が、精神が耐えきれなかった。ただの人間では駄目だ。そう考えた人間達はこう思った。
人間の体を、つくりかえてしまえばいいと。

人を喰らい、生きる化け物。
それを神と信奉する人々。
そのいずれもが、赤司の想像の範疇を超えていた。

「神として信奉されていながら、中々の態度だね、それ」
どこか物憂げな雰囲気のままに氷室は
「……そうですね。あれは神というかこどものような生き物でした。僕は一度しか喋ったことがありませんでしたけど」
「教団員は誰もがそいつと話せるものなのか？」
「いいえ。肉のほうであればともかく、僕は両親が熱心な信者で、その前の祖父母もそうだったらしいです。だから、特別にだったんでしょうね」
「肉の……ほうとは……」
「……『ひかりさま』の体の一部ですよ。……十年前に分割された、その一部です。とはいえ、もう生き物としては死んでいます。その特性は生きているけれど、それ自体が鼓動を刻むことはありません」
「聞いてもよくわからない……もう一回最初から話してくれるかい。順序を追って、考えたい……」
「そうですね……すこし、急ぎすぎました」
そうして黒子は、静かな、されど強い意志を秘めた視線を赤司と、氷室に向ける。
「多分、聞いても信じてはもらえない話です」

幸いというか、『ひかりさま』は体を切り落としてもある程度は無事だった。そしてその肉片の一つを、教団員へと食べさせたのだ。もしそれが適合すれば雌になれる。男でも女でも、神の子を孕み、産める。

だが、再生速度が速い強靭な肉体に変化したものや、逆に体に合わず変死を遂げた者も居る中、完全なる雌へと変化を遂げた存在は誰もいなかった。そして、いくつかの事実がわかった。

神の肉を食した人間は、己の命と引き換えに、他者の命を蘇らせる事が出来るという事実。そうして蘇らされた人間は、神の肉を食った存在と同じではあるが、適合するのかどうかは、最後までわからないとのことだった。

神は生き物を作り替える力を持っていたのに、自身の雌にだけはそれをしなかった。出来なかったのか、しなかったのかは、神のみぞが知る所であろう。

そうして十年前。神の処遇を巡り、教団内は大いに荒れた。そうして純粋に『ひかりさま』を、神を崇める一人の幹部はそれを嘆いた。だから、隠したのだ。切り落とした肉片だけを残し、教団内から『ひかりさま』は消えた。幹部は自殺し、一体、どこへ『ひかりさま』の本体を持って行ったのかわからない。

罰なのだと、誰かが言った。偉大なる『ひかりさま』を疑った罰なのだと。

それに異を唱える人間はいなかった。

そうして彼らは、失われた生きるご神体である『ひかりさま』の行方を、求め続けていたのだ。この十年、ずっと。

「……それが、僕の知っている事実です」

黒子が話し終え、持ち込んだバニラシェイクを口にすると、すでにそれは生ぬるくなっていた。一口飲み終えると、氷室が不躾な視線を黒子にぶつける。

「……教団の規模は大きいのかい？」

「ええ。……財界にもかなりの数の信者が居ると聞いた事があります。最も内容が内容なので皆さんひた隠しにしているようでしたけれども。一般人の中でも僕のように子供の頃から何も知らずに連れて来られ、何の疑問もなく信奉する存在も、確かにいたでしょう。まぁ僕はひねくれ者なのでその存在に疑問を持ちましたが」

そこまでずっと無言だった赤司が、恐る恐る黒子に問う。

「何故、お前は、教団の教えに疑問を持ったんだ？……こう言っては何だが、親の信じているものを子供も信じるのは当然のようなことだろう？」

「ああ、それはですね。……僕が、彼と対面したからです。異形の神『ひかりさま』と」

どういう基準で選ばれたのかわからない。ただ幼い黒子はさして広くないその部屋で、それと、対面していた。
不思議な生き物だった。
青と黒が基調で見ようによっては赤も混ざって見える。図鑑で見た軟体動物が、もっと怖くなったような、そんな生き物だった。
『どうして、つがいがほしいんですか？』
両親が躍起になっているそれを、黒子は問うた。黒子も幼少の頃にその肉とやらを食べさせられていたが適合する事は無かった。
『…タメシタイ、カラ』
ぎちぎちと、奇妙な音を立てながら、それは言った。
『ワカラナイ、シリタイ』
全てを知るというこの神でも、知らないことはあるのかと驚いたことは覚えている。
『マコトナルヒカリ、キレイ』
彼と雌が交われば生まれるというそれが、ひどく気になっただけで。
結局、黒子はこの時の会話を誰にも言わなかった。
ただ思ったのは、万能の神は万能ではなく、こどもみたいだということだった。
「能力も知識も、確かにあった。だけどその精神性は子供そのものだった。もっというと感情自体理解できていなかったのかもしれません……」
「なるほどね。それでこっちに繋がる訳か……」
黒子の話を聞き終え、溜息がちに呟いた氷室は、足元にあるのは大きな紙袋。氷室はそこに手を入れると、複数冊のノートを取り出した。
「これは……？」
「うちの大学の方の元教授、原澤氏の研究ノートだ。彼の家から結構前に拝借したんだ。恐らくは、彼がその『ひかりさま』とやらを託された存在だった」
そうして氷室は、眉根を寄せながらそれを開いた。
『とても希少なサンプルを託された。奇っ怪な見た目に反して意志を持っている。だが、ある事情から体の半分以上を切り落としており、以前程動くことは出来ないらしい。彼を預かることになったのも、きっと何らかの縁だろう。折角だから、名付けることにした。かつて母がかっていた黒猫の名前を。ひかりと呼ばれていたかれには、相応しいものだろう。
大きく輝く。大輝と、名付けた。
だいきと呼ぼう。愛しい子。
今日からよろしく』
日付は今から十年前のある日を示していた。

「原澤教授は優秀だった。研究者には人前で己の成果を披露したい人間と、そんなこと関係無く己の研究を極めたい人間の二通りいるんだ。原澤教授は後者だった。彼は十年に渡り、『ひかりさま』を、いや『だいき』を育成し続けたんだ。……全部読んで貰いたい所だけど、多すぎるから飛ばすよ」

氷室は、そう言いながら、十年にも及ぶその記録の中から付箋が付けられた箇所を開いていく。

『傷が癒えてきたが、記憶に不備が生じているようだ。私の事を父と呼んでいる。家族という認識がだいきにあるのかはわからない。そのまま継続して様子を見る』

『好む食物。生肉。それも生きた餌が好きらしい。死んだモノでも食べるが生き餌には劣る。実験用のラットを与えてみたら凄い勢いで齧り付いている。今後も調査を続ける』

『前から思っていたがだいきは非常に知的好奇心が旺盛のようだ。九九を覚えたかと思ったら今度は因数分解まで習得していた。人間とは比べものにならない速度だ』

『すでに大学で学ぶような難解な数式も化学式も理解しているようだ。だが、明確な答えを出せる理数系はともかく、国語の、特に評論系は理解し難いらしい』

『だいきに、感情の理解は難しいようだ。知識欲は旺盛だが、人の情緒というものを理解は出来ないらしい。わからないことが気になる。好奇心はあり、人の暮らしというものを理解はしている。だが、人を愛し、慈しむことは理解出来ないようだ』

『だいきの食事を用意するのが大変になってきた。猫も犬も、野良のは全て、食べ尽くしてしまったように思う。新たな入手方法を考えなくては』

『餌として与えた犬の姿が変容していた。だいきに問うと自分がやったと言う。何かを作り替える力、目にしたのは初めてだった。検証が必要』

そうして氷室は重々しい表情のまま、あるページを開いた。

『どうやら、だいきと過ごす時間も終わりに近づいているらしい。猫殺しの現場を見られた事と諸々の事を含めてクビを言い渡された。そして、だいきが元々居た教団とやらも私の存在に気が付いたらしい。

ああ、大輝。わたしがいなくなっても、強く生きるように。いつかお前の望む存在が、お前の前に現れることを私は願って死にに行こう。

異次元から来た存在。

異形の神。
己の血肉を与えることで同胞を作り出そうとする神よ。
愛するものを求めながらも、愛を理解出来ないものよ。
私の愛しい子よ。大輝。どうか、無事を』

それだけの記載を元に、日記は終わっていた。

「……俺は原澤教授の猫殺しの一件が信じられなくてね。彼が辞めてすぐに、家を訪ねたんだ。本人はいなくてそこで、このノートの山を見つけた。……まぁ教授自身はもう死んでるんだろう。どこかはわからないけれど」
「原澤さんは以前教団に出入りしていた。僕も、会ったことがありました。最後に会ったのは五年ほど前でしたがあの頃にはすでにひかりさまが手元にいたんですね」
氷室と黒子がそう言い終えると、室内には重苦しい沈黙が訪れる。

「……大輝という存在についてはわかった。だが、火神の変化と、涼太達の失踪はなにか関係があるのか……？」
怯えるように口を開いたのは赤司だった。
今ここで、ありとあらゆる状況を伝えられても理解出来ないのが当然のことだろう。だが、赤司はそれでも本人なりの理解をしながら、それでもわからない事を問いかけた。
異形の神と友人の変化に何か繋がりがあるというのか。

「これは推測です。事実ではないかもしれません。……火神くんの現在の保護者である大叔父さんは教団の団員です。そして、火神くんのお父さんも、教団の集まりに参加していたそうです……最もお父さんの方は正式な団員では無かったようですけど」
「なんだって……？」
どこか悲しげな黒子の呟きに赤司は目を剥く。
「……火神くんのお父さんがどんな状態で見つかったか聞いていますか、氷室さん」
「骨も肉片も残っていなかった。空の棺で葬儀を出したって噂では聞いたね……それと、火神君の方は、死んでたのに、病院に着くなり息を吹き返したって……ただの噂だと思っていたけど、まさか……」
「火神君のお父さんが、『ひかりさま』の肉を食べていたとしたら、死の間際にありながら、息子を助けたいと願って自分の体を犠牲に火神君を助けたんでしょう。そうすれば何も残らなかったという事実にも納得が行きます。…そして、助けられた火神君が『適合』していたら？神にとってのつがいとなっていたら？もし、彼と神が出会ったとしたら？神はきっと彼を、手放さないでしょうね」
「半年ほど前に病院で起こっていた異常事態も、『ひかりさま』のやったことだと言うのなら納得が行くね……人間じゃあんな事出来ない。猫も臓器も餌だったわけだ……そこで、二人が出会っていたの、かもしれない」

「だが、化け物なんだろう？何故そんなものに火神は……」
「肉の、副作用かも知れません。正直、完全に適合した人間というのは今までにいないんです。だけど、副作用で、世の中全てが肉と臓物に見えるようになった人はいます。結局自殺したそうですが……その人は言ってました。『ひかりさま』がとても美しい少年に見えたのだと……くるったひとの戯言だったのかもしれませんが」
氷室は何かに納得したかのように頷いた。
「あとは手術の後遺症でもあったのかもしれない。脳の器質部位をいじったことで、彼の感覚は肉の副作用とそれで変質したのかも知れないね。だけど彼は、誰にも言わなかった……たった一人で孤独に耐えて……そうして、出会ったのか」

異形の神
『ひかりさま』
だいきと、出会った。

人の理と外れた人間と、人を理解したいと願う異形が出会った。
推測だけれどもそれが、始まりだったのだろう。
そこに芽生えたのが何だったのかは、わからないけれども。

異形が本当に人の肉を食うのなら、涼太を初めとした皆は奴に喰われたのだろうか。
そんなことを赤司はぼんやりと考える。だが次の瞬間耳に入ってきた言葉に耳を疑う。
「もし、火神君が『ひかりさま』の子を孕めば……この世界は変容してしまいます」
何も感じさせない声音で、黒子がそう言うが赤司には理解の範疇を超えたものだった。
「どうして……なんでそんなことになる！？」
「教授のノートにもあっただろう。あの生き物は、自分以外の生物情報を書き換える。いや乗っ取るんだ。人の肉体を持たない神が、生きるための手段なのかもしれない。……仮にあの生き物が古来から潜んできた異次元の生命体であるのならば目的は自分たちが生き延びるための、種族の乗っ取りだってやってもおかしくはない……そして望んだ雌がいて、『まことなるひかり』を生み出す存在が居る……奇跡だって起こせるというのならやりかねない」
研究者として氷室は冷徹なまでに客観的に分析しつつ、言った。
「今の『ひかりさま』が願えば地球上の全ての生き物が書き換えられていくということです。」
赤司は、黒子が何を言っているのか、理解出来なかった。

たいがのともだち、たべちゃった。ごめん。たいがにもあげたやつ。

火神の腕の中で泣きながら、そう言うだいきをただ抱きしめていた。事故に遭ってから自分が美味いと思ったあの食物はどうやら友人の死肉であったらしい。だがさして動揺は生まれない。そうか、とだけ呟いた。

ああ、俺は本当に狂っているのかとそこでまた認識した。

だいきが殺した黄瀬の肉を食って今日まで暮らして、何も気が付かなかったのは自分だ。だいきは何も、悪く無い。緑間と紫原は、黄瀬の携帯を使って呼び出したということだった。直前までやりとりしていたメールを見て二人の存在を知ったからだった。

「ノート……そういや……無かった、悪ぃ……」

「あああれ……。もういいよ。もうふたりやって弄り方はわかったから。……あのさ、大我は元に、戻りたい？」

「元にって……？」

この間からだいきはそう言うが、訳がわからない。何を戻すと言うのか。

「たいがが願えば……だいきは、たいがの世界を元に戻せるよ」

「……なん……だって？」

事故の後からずっと見続けているこの赤い狂った世界。それを一体どうして彼は。

「いっただろ。だいきは書き換えられる。生き物の情報を。たいがは脳と……体のそれを取り出せば……元に戻るよ。でも、そうしたらたいがのもとに、いられない」

「なんでそんな……ずっと一緒にいるっていっただろ！」

縋るように、だいきの肩を掴むと、どこか大人びた悲しい笑顔と目が合った。

「ほんとうのだいきをみたら、たいがはきっとわらってくれない。そんなの……いやだ。おかしいな。さいしょはたいがのことただの観察対象だったのに。なんでかな……ずっといっしょにいたいって…思うようになっちまった……たいがが、雌だったからとかじゃなくて……たいがだったから……良かったんだ」

何を言っているのか半分ぐらい理解出来ない。だけどだいきは泣いているのに、笑っている。

そんな顔でだいきは火神に問う。

「ねぇ……たいが。……どうする？」

不安げな瞳が、ただただ火神を見上げていた。

第六章　融合

元の体に戻れる。
元の世界を感じる事が出来る。
それはきっと色とりどりのものがいて、この血と臓物に塗れた世界とは異なるもの。
だけど、そこにだいきはいない。火神がそれを望んだら、だいきは姿を消すのだ。

己の腕の中に収まるだいきを見る。
青い髪に青い瞳、浅黒い肌の少年。
彼の本当の姿が何なのかわからない。だけど、人間を人間として知覚出来ない今の自分にとって、人間に見えると言うことは、きっと人間ではないのだ。だけど、それで構わない。だいきは、確かに、火神を救ってくれたのだから。

「どうする……？」
不安げな、涙が滲んだ青い瞳が火神を見上げる。
それを見て、火神の胸にどうしようもないぐらいの愛しさが募った。答えなんて、最初から出ていたんだ。
「俺はお前と、だいきと、一緒に居たい……離れたくなんか……ない」
「たいが……」
だいきがその手を火神の両頬に触れる。
温かく、柔らかいその手にどれだけ救われた事だろう。
「ほんとうに、いいの？」
「今更だろ……俺はお前と会って救われた。……寂しさから逃れられた……もう二度と、離れたくなんて無いんだよ」
「さびしいの、いや？」
「……そうだな……こわい。お前が、俺から離れていくのが、こわい」
「じゃあ、だいきとはなれないのが、たいがの願い？」
幼いのに、どこか凛とした雰囲気を讃えてだいきは言う。だから、火神は頷いた。

「……だいきと、ずっと、いっしょにいたいんだ」

反対に火神の目からは涙が零れていく。子供のように、みっともなく泣きそうになる。そういえば、最初もそうだった。久しぶりに見て、触れる、人の温もりが優しくて、ただ泣いた。だいきはそんな自分のそばに居てくれた。

「これが、あい、なのかな……とうさん……」
「だいき?」
どこか遠くを見ながら、何かを懐かしむような声音でだいきは言う。
そうして彼は火神に向き直った。
「たいがが願うなら、だいきはそれを、叶えるよ?ふたりでひとつになって、ずっといっしょにいられるように、するよ。だって、一人は、さびしいんだろ?おれも、たいがといっしょに、いたい。ひとつに、なりたい。そうしたら、さびしくないよな」
そう言って差し出されただいきの手を、取らない理由なんて、火神には無かった。

「お前はそれでいいのかテツヤ!?自分が……死ぬかもしれないんだぞ…!?」
「……僕は、『まことなるひかり』が見たいだけです。自分が死んでも……そう言う意味では、僕はとうの昔に狂ってるんですよ」
「ずっと。そう思っていたのか……お前は僕らを……」
「誤解しないでください。僕がひかりさまの可能性に気が付いたのはつい最近です。火神くんの態度を見て違和感を持ってのは事実ですが……僕も知らなかったんです」
「はいはい……青少年は落ち着きなさい」
黒子の胸ぐらを掴み挙げる赤司の間に割って入ったのは氷室だった。
「憤りはわかるけど、今は抑えたほうがいい。教授のノートを見て、だいきっていうのに魅入られたらかなり厄介だと思ってはいたけど予想以上に厄介な相手だよ。本当に」
それに、と氷室は言葉を句切る。
「俺達の推測通りに、火神君のとなりにだいきが、ひかりさまがいるんであれば時間はないんじゃないか?止めたいなら殺す気でやるしかないだろう。君にそれが、できるのかい?赤司くん」
「僕は……」
赤司はただ、以前のように友として過ごしたかっただけだ。他愛も無い事で笑い、泣き、怒る。そんな関係に戻りたかったのだ。
だけど、もうそれは、二度と叶わないのだろうと、それだけは、わかった。

「火神くんの家に行ってもいいし、行かなくてもいい。逃げても良いし、逃げなくてもいい……どうなるのかは、誰にもわからないですから」

「テツヤ……お前は、そのひかりさまとやらのことを伝えなくて良いのか？」
赤司がそう問うと、どこか皮肉気に黒子は笑う。
「言いませんよ。……安易な奇跡に頼るような人達に伝える気はありません。氷室さんが、教団に関する情報を探っていると耳にしたので僕が勝手に動いたまでですから」
「そこまで派手に動いたつもりはないんだけどね。全く恐れ入るよ、その情報網には。……ねぇ、世界のためには、きっとそのだいきっていうのを止めた方がいいんだろうね。だけど、俺は、そこまで積極的に止める気にはなれない。愛をしらないその異形は、人に会って人と関わって、本当に、愛をしらないままだったのかな。ひょっとしたら、知る事ができたのかな」
静かに、氷室は言う。
「愛を知らない生き物は、されどつがいたいと願うものを見つけた……本能なのか、意志なのかはわからない。だけど孤独なそれが出会って惹かれあったのたのなら、俺達に何も手出しは出来ないいんじゃないかって……」

人の枠から逸脱してしまった人間。
愛を求める異形。
孤独な魂が出会い、寄り添うように恋をした。
愛することを、愛されることを知った。

唯一無二の存在を守るためならば、あの二人はきっと、それに害を為そうとする存在を決して許さない。
きっとあの二人の世界に、他者はいらないのだ。

「愛することに種族は関係無いんじゃないかって……俺は思っちゃうけどね。……犠牲になった君の友人達には悪いけどさ」
「あなたは……いいんですか？自分が死んでも……化け物になっても」
「そうだね…まぁ嫌だと言えば嫌だ。だけど、黒子くんの言うように、世界が変容していくのであれば、俺はそれを見てみたい……俺もどこかおかしいんだよ。緑間くん達に言っておきながら、俺も魅せられたのかもしれないね……異形の神に」

君は、どうするの？

氷室はそう言って赤司に対して悠然と微笑んだ。

「ほんとうに、いいのか？」
「今更だろう？……俺はな、だいき……お前と離れて、お前が俺の側からいなくなって、お前を感じる事が出来なくなるのが一番怖いんだ……」

火神の部屋で、火神とだいきは二人、向かい合っていた。
確認するようにだいきは問い、そして火神は頷く。
狂った自分が生きていくのは、だいきの側でないと駄目なのだ。他の誰でも、何でも、この孤独を癒してはくれない。

「だいきが……最初は、観察対象として近づいたって言ってもおこらないのか？にんげんの、情報が欲しくて、それで、近づいたんだぞ？いいのかたいがは……？」
どこか慌てたような顔で自分を見るだいきが、火神にとっては心底愛おしい。
「難しいことはわかんねぇけどお前になら、騙されてもいい。お前が俺の事を好きじゃなかったとしても、騙されてお前の隣に居られたならそれでもいい。そう、思うんだ」
だいきにならば、殺されても、構わない。死の間際まで彼と共に居られるならば、それでいい。
彼の正体が何であれ、それが火神の本心だった。
「……どうしてたいがは、そこまで、いえるんだ？」

困惑するような、そんな顔は、初めて見たような気がする。この期に及んで、彼の、新たな表情を見ることが出来て嬉しいと、そう思う自分は、本当に末期なのだろう。そう火神は考える。
でももうどうでもいい。
火神の世界にはだいきしか、いらない。
そうしてきっかけがなんであれ、だいきという存在が、火神の事を少しでも思ってくれていたならば、こんなに嬉しいことはない。

「だいきを、愛してるから」

火神は笑う。
静かで、綺麗な、微笑み。
そして何よりも、深い愛情を秘めた笑顔だった。

「あいしてる……だいきを？」
「そう。愛してるから、いっしょにいたい。愛してるから、なにされてもいい。愛してるから、殺されたって構わない……ずっと、一緒にいられるなら、俺はそれでいい」
火神のだいきへの愛情は、執着は、世界でただ一つの美しい存在に対して向ける依存に過ぎないのかもしれない。
一人は寂しいから、一緒にいたい。根底にあるのはそれなのだ。

「あのな、たいが。だいきは……あいしてるとかそういうのはわからない。ずっと、わからなかったんだ。だから、それが知りたかった。でも、たいがといっしょにすごして、雌とかそんなの関係無く、ずっと一緒にいたいっておもうようになって…なぁ、これが愛するってことなのか？おれは、たいがを、愛していいのか……？……いっしょにいたいって、おもって、いいんだな……？」
　だいきが、懇願するような声音で火神に告げた。
　普段は姿形の割に、大人びて見える彼が、子供のように不安げに、火神を見る。それがとても、嬉しかった。
　火神がそう願うように、だいきも同じ事を思ってくれていることが。

　頷くと、そこでようやくだいきは、笑った。

「だいきも、たいがを、愛してる」

　火神とだいきのそれは、普通の愛とは違うものかもしれない。だが、この期に及んで他との比較は必要だろうか。いや、いらないだろうと火神は思う。
　歪んだ世界で、歪んだ存在が出会って、互いを求めた。そして、それが永遠に続くことを、願った。

　共に居られれば、それでいい。

　きっとそう思ったのは、火神も、だいきも、同じだったのだろう。

　そうして、どちらともなく口づけた。

　ひとつになるのだと、だいきは言った。
　ひとつになって、うまれるのだと。
　交わるのは初めてではない。子供の体格そのままのだいきに翻弄され、いつも気が付けばいいようにされていた。他の人間とそういう行為に到ったことはないので、比べようもないのだが、ただ気持ちが良いと思っているうちに終わっていく。
　一階にかつての友人の死体が転がっている状態で、二階の自室で行為に及んでいるというのも、普通ではあり得ないのだろう。だってもう、普通じゃない。

「うまれかわるんだよ、たいがと、だいきが、ひとつになる。たいがの腹の中で育ったそれが奇跡を起こす……おれと、たいがのねがいを、叶えてくれる……世界は、生まれ変わるんだ」
　繋がりながら、恍惚とした表情でだいきが笑うのが見て取れた。

「お前がいてくれれば、それでいい」
火神の願いは、思いは変わらない。それを告げると、だいきはまた、笑う。

そうしているうちに、徐々に、息苦しさを、感じてきた。
「はじまった……こわくないよ?たいが」
「……そう……だな……」
だいきの言うところの変容が始まったのだろう。火神の意識がどうなるのか、火神という存在がどうなるのかわからない。

「だいきはずっとそばにいる。いっしょにいるよ。たいが」
だけど、例え世界を敵に回しても、側に居たいと願った存在が、一緒にいてくれれば、どんなことでも耐えられると、思った。

「……愛してる、だいき」
腕の中のだいきの温もりを感じながら、微かに見えただいきの顔が、まるで大人のように見えたのは錯覚だったのだろうか。

それが火神大我の見た、最後の光景だった。

光の中に自分自身が溶けるような感覚。

光が、生まれる。

光が、願う。

そうして世界は、変容した。

最終章　開花

もうこの街で人の形を保っているのは自分だけなのでは無いかと赤司は思う。見慣れた街は血と臓物と肉塊に包まれた悪夢の如き場所へと変わっていった。

道を歩くあれは、人だったのだろうか。それとも、犬や猫なのか。わからない。

いち早く変質し、えぐり取った左目の部位に埋め込んだガラス玉に違和感を感じながら赤司は歩く。あてもない何かを探すために。

あの日、黒子や氷室と別れ、赤司は一人で火神の家に向かった。殺してでも止める覚悟があったのかわからない。ただ、真実を知りたかった。

鍵のかかっていない玄関を開け、足を踏み入れ感じたのは夥しいまでの血の臭い。リビングでは緑間と、紫原が無残な遺体となって倒れており、そして冷蔵庫からは黄瀬涼太だったものが見つかった。気に入りの、ピアスとリング。それが無ければきっと判別も出来なかった。

そうして足を踏み入れた二階の、火神の部屋で目にしたものは、あまりに異様なものだった。

赤黒い触手のようなものが部屋中に張り巡らされ、火神のベッドの周囲には殊更に大きな肉塊と呼ぶに相応しい何かがあった。

そうして、そこにいたのは小さな子供だった。

目を閉じて横たわるのは赤黒い髪の子供。その子供と抱き合うようにしているのは青い髪に浅黒い肌の子供。

「かが、み……？」

友人であり、この家の家主である少年がまるで縮んで居るかのようなそんな姿に思わず呟く。そしてさほど大きな声では無かったはずなのに。二人の少年はゆっくりと目を開く。

赤い瞳と青い瞳。

二対の瞳が何の感情も無く、赤司を見つめている。

やがて二人は互いの顔を見合わせ、ふわりと笑った。

それはとても、美しい笑顔だと、思った。

だけどそこから赤司の記憶は飛んでいる。

気が付けば、赤司の世界は今見ているようなグロテスクな世界に変容していたのだから。どこが自分の家かも、何があったのかもわからない。生き地獄のような世界をただ彷徨う。これが、火神の見ていた世界なのだろうか。ふとそんなことも考えた。

『まことなるひかり』が見たいと願っていた黒子や、氷室がどうなったのかもわからない。ただ、変化を望んだ二人より、何も答えを出せなかった自分が生き残っているのは皮肉だと思った。

このグロテスクな世界は、火神にとって美しく写っているのだろうか。いや、だからこそ、世界は彼にとって美しく見えるように変容したのだろう。

他の何を捨てても、異形の神と共に居たいと火神は願った。そうして神はその願いを叶えた。神は己の願いと共に、つがいの願いも、叶えたのだ。

あの子供達は、彼らの子供だったのかも知れない。

黒子が言っていた『まことなるひかり』そのもの。

奇跡を起こす、存在。

そうして奇跡は起こった。この地球の生き物を全て変容させることで。全てを飲み込もうとしている。そうして、彼らは全てがいなくなった地球の創造主でもなり得るのかも知れない。

最も赤司がそれを見届けることは無理なようだ。

数日前から赤司の右腕に違和感を感じるようになってきている。右腕から始まり、全身が変化していくの時間の問題だろう。

だが、思う。

愛を知らない異形は、火神と出会わなければ、そもそもこれほどまでの力をふるわなかったのではないだろうかと。好奇心の赴くがまま、知識はあれど、精神的には子供そのものだったという神は、火神と出会って過ごす事で、人についての何かを知った。失われたパズルの、最後の一ピースを見つけたのかも知れない。

それはきっと、愛だった。

愛を求めた異形は、ただひたむきに己に愛を注いでくれる存在を知った。愛を知った。火神が、赤司の知っている火神大我であれば、きっと彼はどこまでも優しかったのだろう。きっと、それを、愛したのだろう。つがいだから、雌だから、そんなことは関係無く、火神大我という存在に、執着した結果の、今なのかも知れない。

「それが、お前の幸せなのか？……火神」

友だった、いや今でも友だと思いたい、友人の姿を思い浮かべ、赤司は空を仰ぎ見る。不思議と、世界が変質しても空の色だけは変わらない。

時折聞こえる、人が肉塊に変わっていく音。
絶え間なく様々な音を刻むそれは唄のよう。

強いて言うならば、かみのうた。

いや、だいきのうたとでもいうべきだろうか。

うたは、やまない。
きっと、この星の全てを飲み込むまで、止まらないのだろう。
世界を壊す恋の終わり。いや、終わりの始まりだ。

次の人生なんてものがあるのかはわからないけれど、今度こそ皆で笑って過ごしたいと、赤司は願い、そうして瞳を閉じた。

青い髪の少年と、赤い髪の少年は手を繋ぎ合って笑う。

彼らの目には、世界は美しく見えていた。
世界は、光に満ちていた。
彼らは、神だった。

「ずっと、いっしょだよ」
「ずーっと、いっしょだね」

絶対にその手を離さない。絶対に隣から離れない。離れることなんて許さない。

「あいしてる」
「おれも、あいしてる」

彼らは、奇跡。
人と異形の神が結ばれたが故の産物。
彼らの子供でもあり、彼ら自身とも言えた。

「はなを、さかせようか」
「きっと、きれいだな」

そうして彼らは、彼らにとっての光に満ちた美しい世界を前に、微笑んだ。

だいきのうた（完）

番外編　幸福な箱庭（書き下ろし）

永遠が絶対的なものだなんて、誰が決めた？
俺は信じない。この世の中に絶対なんてものはない。
火神大我は常々そう考えている少年だった。

火神大我にとって、家族とは父だった。早くに死別した母に代わり男手一つで育ててくれた父の事が火神は好きだった。仕事の都合で中学に入った頃に単身赴任してしまい滅多に会えなくなったが、それでも彼は父親を慕っていた。

「本当に、ファザコンですよね……火神くんは」
「うっせぇ、言ってろ」
部活後の部室で着替えていた火神の隣で友人、黒子テツヤがそうぼやく。水色が印象的な彼は何とも言えない透明感に満ちた存在だった。
「でもこの年になって、お父さんとのデートが楽しみって奴もそういないっすよ？」
「デートじゃねぇよ。親父が帰ってくるからメシ食いに行くだけ」

着替え終わった火神の肩にのし掛かるようにそう言ったのは黄瀬涼太だ。背は大柄な火神並みに高いのに、何とも言えない人好きのする笑顔が近寄りがたさを軽減していた。
「でもー……楽しみなんでしょ？」
「まぁな。唯一の家族だし」
ロッカーの荷物の出し入れすると側に立ったのは火神よりも更に大きい紫原敦だった。放課後の部活も終わり、大体の生徒が帰宅していく中、残ったのはいつものメンバーだった。
「火神の家はご家族が一人だけだから、俺達と比較するのも失礼なのだよ」
「確かにな。家族を大事にするのは良いことだろう」
緑間真太郎が眼鏡をかけ直して言えば、その隣に立つ赤髪の青年、赤司征十郎が笑う。
「……悪かったな。突然部活休ませてくれ、なんて言って」
本当は、土曜日の明日はバスケ部の部活日だ。だが父親が帰ってくることになり、火神は急遽部長である赤司に休ませて欲しいと申し出たのだ。
「いいや。気にしなくていい。滅多に会えないご家族との時間を楽しんでこい」
「……ありがとな」
そう言って火神は笑う。それはありふれた日常の一コマに過ぎなかった。

火神大我が彼らとそれぞれ出会ったのはクラスメートで同じ部活に入部したことがきっかけだった。優等生から成績不良生徒まで入り乱れる彼ら五人を周囲は奇異の目で見たが、当人達は楽しく過ごしていた。
日常とは穏やかに、静かに流れていくものだと、信じて疑わなかったあの頃。

なんと生ぬるい幸福に浸っていたのだろうと、今では思う。

「大我？どうかした？」
「……なんでもねぇよ」
過去に思いを馳せていた火神は腕の中にいるだいきにそう声を掛けられ意識を覚醒させる。そうだ、今は入浴中だった。いつものように、だいきと一緒に、彼を抱えるような形で浴槽に浸かっていた。
ちゃぽん、というお湯の撥ねる音が聞こえてくる。
「だいじょうぶ？」
見ればこちらを振り向く不安げな青い瞳と目が合った。
「……大丈夫だ」
そう言って、腕の中に抱きすくめただいきをより強く抱き寄せる。だいきは特に抵抗することも無くそれを受け入れた。
「大我、つかれてる？」
「どうしてそう思う？」
一緒に暮らすようになって当たり前の光景。食事も入浴も睡眠も全てをだいきと共に過ごす。家でだいきと過ごすこの時間だけが火神の心に安らぎをくれた。
それ以外の世界は肉と臓物で覆われた、醜悪な光景しか映し出さない。
「……なんか、なきそうだぞ」
「そうか……」
思っても仕方が無いことなのだ。世界が彩りに満ちていた時の記憶なんて、思い出してもどうにもならない。火神の世界は変容した。だけど変容しなければだいきとは出会えなかった。
だから、これでいいと思おうとしていたし、事実今ではそう思っていた。

父親と会うのは数ヶ月ぶりのことだった。
待ち合わせ場所で父親の姿を見かけて親父、と呼んで駆け寄れば大好きな赤と目が合う。
「ただいま、大我。元気だったか」
「そりゃこっちの台詞だよ。おかえり、親父」

年齢差はあれど二人の容姿はよく似ている。赤みがかった髪色とふたまたの眉毛。十人中十人が血縁者であると断言したであろう。そのぐらいよく似ていた。
「いつ帰るんだ？今日か？明日か？」
父親の荷物を持とうとすればやんわりと断られ代わりに白い紙袋を渡される。十中八九お土産だ。子供扱いされているようで悔しいが、同時に嬉しくもある。父親のお土産は確実に火神のツボをついたものばかりだったからだ。
「うちの息子はそんなに速く帰って欲しいのかい？月曜日の朝に戻るよ」
「マジで！珍しいな！」
そう言えば父親は楽しげに笑う。
「全くお前は……変わらないな」
「いいだろ、別に」
高校生になっても父親との外出を喜ぶのもおかしいのかもしれないが事実楽しんでいるのだから仕方があるまい。父は火神にとって唯一の家族で、大好きな人だから。誰に何を言われてもそれは揺るがない事実だった。

自宅に戻り、荷物を置いて、駐車場に停めてあった車に乗る。いつものように助手席に乗ると、それはゆっくりと動き出した。
「最近、仕事どう？」
「相変わらずだな。この景気ではどこも厳しいよ」
「……そうか」
「でも、家に戻ってくる時間ぐらいはあるから安心しなさい？」
「……別に、そんなんじゃねーし」
とは言っても父親には見抜かれているのだろう。そう思うと少しだけ気恥ずかしい。火神が父親を慕うように、父親も火神を愛した。たった二人だけの家族だから、それが当然の事だったようにも思う。

「お前に……話しておきたい事があるんだ」
ぽつりと父親がそう言ったのは、車が大分進んだ頃だった。
「話しておきたい事って？」
横から見る父親の面差しが酷く真剣だったことを覚えている。
「……もし、私に何かあって頼る人がわからないときは、私の大叔父を頼りなさい。お前は会ったことはないけれど、あの人は何かと顔が利くからきっとお前を助けてくれる」
「なんだよ、それ。まるで自分になにかある、みたいな口ぶりじゃねーか」
親父らしくない、そう言えば、父親は口元だけで薄く笑った。
「……そうだな。杞憂であればいいと私も思う。だけどね、大我覚えておきなさい。絶対なんて言い切れるものはない」

「絶対？」
「そう、絶対的に揺らがない、変わらないものなんて無いんだよ。普遍的な事を望み、願いその為に行動するのはとても難しい事だ。どんなことでもね」
父親はそう、昔から突然難しい事を話し出す。頭の悪い火神には理解が難しかったけど父親の言うことだから、と必死になって聞いていた幼き日の記憶を朧気に思い出す。
「昔も、そんな事言ってたな。確か母さんが死んだ頃」
「そうだね。言ったような気もする……永遠を望むなんておこがましいことだった、って。ちょっと難しかったかな」
「……それは、母さんが死んだ時に思った。絶対に死なないでって言ってもそれは叶わなかった。だから、絶対なんてことはないんだって、ずっと思ってた」
絶対に、なんてことはない。
永遠に、なんて信じない。
だって、母さんは大丈夫よって笑ってたのに、次の日会いに行ったら冷たくなって動かなくなっていた。子供の頃の、母親が死んだその日の記憶を朧気に思い出す。
だから火神大我は永遠につづくものなんてないのだと、知った。愛し守り庇護してくれる母親がいなくなったその日に、強くそう思った。
火神大我は信じない。絶対的なものを、永遠という言葉を。少なくとも子供の頃からそう考えていた。

「でも、なんで俺にそれを話すんだ」
「……それは」
父親が何かを言いかけた瞬間に、火神が感じたのはとてつもない衝撃で、例えようも無い痛みに声を挙げることも出来ないまま、そこから記憶は途切れている。

事故だった。一台の車の運転ミスが引き起こした多重衝突事故。そこに火神と父親が乗る車も巻き込まれた。
一命を取り留めたのが奇跡だと称されるような、酷い事故で、火神は生き残ったものの父親は死んだ。
一人に、なった。
そう自覚したのはようやく意識を取り戻した頃。確か五感の回復手術を受けた頃だっただろうか。

そうして火神の世界は変容した。
全てを血と臓物に映し出し、頭痛しか及ぼさないノイズしか聞こえない世界に。誰に言っても理解されない孤独の世界。いっそ、父親と一緒に死んだ方が良かったとすら思い、全てに絶望した。
そんな時に出会ったのが、だいきだった。
全てが歪んだ世界で、今なお正しい形を保つ唯一の存在。
火神が愛し、慕うもの。さいあいのひと。

お前がいれば、他になにもいらない。
強くそう思うぐらい、火神はだいきという存在を愛している。依存している。自覚はあれど、どうするつもりもなかった。

「そろそろあがるか？大我」
「……そうだな」
ぼうっと考え事をしていて結構な時間浸かっていた気がする。目に映る世界は全て澱んでいる。それは変わらない。火神大我の目に映り、彩りに満ちているのはだいきだけ。元の世界がどんな色彩だったのかは、もう記憶の中でしか反芻できない。
たいが
かつてそう呼んで、慈しんでくれた人達がいた。既にもう朧気だが。

「よいしょ、っと……大我ふらふらだぞ、ほら」
「悪ぃ……」
「いいよ。だいきは大我のだから、何だってするぞ」
「ありがとな……」
頭数個分違う身長、だけどそんな体格差にも関わらず、だいきは火神を支えて歩く。

風呂だけでなくベッドで、例えば彼に抱かれる時にも遺憾なくそれは発揮される。夜毎繰り返される秘密の行為。精通もまだなのではないかと思われるような幼げな外見に反してだいきのそれはすでに大人のものと同等のものだった。それに夜毎翻弄される。
何も生み出さない非生産的な行為だとは思う。自分も男でだいきも男。欲のぶつかり合いでもなく、ただただ寂しかったからだいきを求め、そして繋がった。腹の中に彼の種を撒かれる行為に何の意味があるだろうか。いや、無くてもいい。ただ自分がだいきの全てを欲するだけ。
きっと今日もまただいきと繋がる。彼を求め喘ぐ自分はなんと浅ましいことだろう。だけど同時にこうも思う。誰に見られるものでもない。だいきさえそれで良いと言ってくれればそれでいいと。
かつて永遠なんてないと火神は思っていた。だけど世界が変わってだいきと出会って、彼と過ごす世界の暖かさに触れて、それがずっと続いていけば良いと願うようになっていた。
二人だけの箱庭。幸せな箱庭。
そこに、誰もいなくてもいい。永遠で無くても長い時間過ごせることを、火神大我はただ願った。

幸福な箱庭　（完）

あとがき

グロ系作品のパロディで青火を書きたい、そんな事を薄ぼんやりと思ったことが「だいきのうた」誕生のきっかけです。いつかは書こうと思っていたのが春コミ中止の衝撃で自分の脳内に何かが産まれて、勢いのままに書き綴ったのはじまりでした。（そうして書き上がった後に風邪を引いて寝込んだので、だいきの呪いだと思った）

パロディ元となったゲームも本当に素敵なんですけどもあんまりその素敵さを描き切れてないので深く反省しておきます。

ちょろっと本編のネタバレになってしまいますが、他の何を犠牲にしても叶えたい恋、それを願い更に実行してしまったのがこの話の青火です。原作の2人はそんな事無いと思いますけども、だからこそあり得ないifの2人としてこんなパロディ書いてしまったのかもしれません。

これは全ての登場人物が幸福になるハッピーエンドではありません。青火2人だけのハッピーエンドとも呼べるお話です。読み手を選ぶ話だとは思っておりますが、少しでも楽しんで頂けたら幸いです。

いつも励ましてくれるうじゅ先生,表紙の文字デザインをやって下さったヒイラギさん。そしてこの本を読んで下さった全ての方に、ありがとうございました。

2013.6　みししっぴ（みしり）

作業中BGM
沙耶の唄
ガラスのくつ
Miracles May

いとうかなこ

発行日：2013年6月30日
発行者：千波屋みししっぴ（みしり）（れもとま）
印刷：株式会社ポプルス様
mail:kumaneko.cm347@gmail.com
pixivID:4837754
twitter:misisippy3

SpecialThanks:ヒイラギ様
※18才以下の方のご購入はご遠慮下さい
※無断転載、ネットオークション厳禁でお願いします。

黒子のバスケ　FanBook06

青峰×火神　パラレル　© れもとま